蒲田部木原　7次

福岡市埋蔵文化財調査報告書第836集

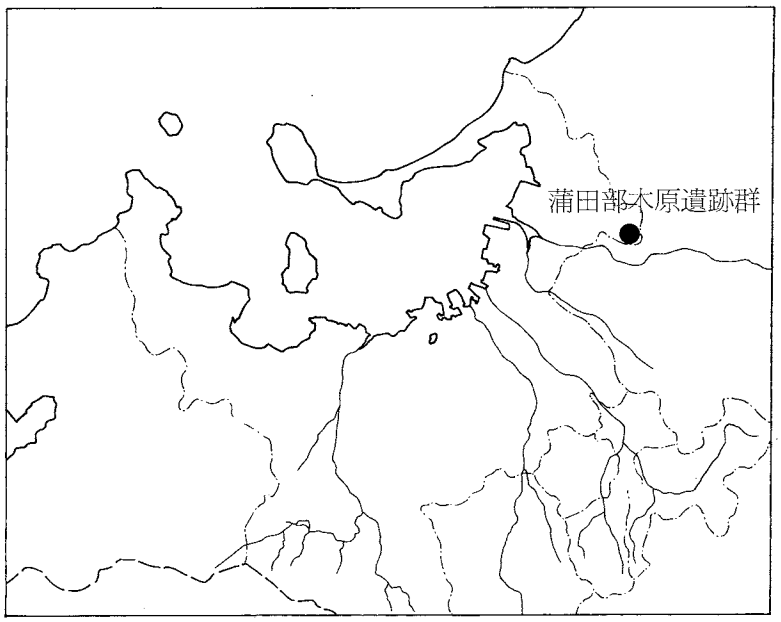
2005

福岡市教育委員会

KAMA TA HE KI BARU

蒲田部木原 7次

福岡市埋蔵文化財調査報告書第836集



2005

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから東アジアとの対外交渉の窓口として発展してきました。このような環境のもとに数多くの埋蔵文化財が残されており、本市ではこの保護と活用に努めているところであります。

本書は東区蒲田における倉庫建設に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査の記録です。調査の結果、当地域の歴史を知るうえで多くの貴重な資料を得ることができました。本書が埋蔵文化財保護のご理解の一助として、また研究資料として僅かでも役立てば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり井上政実氏をはじめ多くの方々のご理解、ご協力を賜りましたことに対し、心より感謝の意を表する次第です。

平成17年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 植木 とみ子

例　言

1．本書は福岡市東区蒲田３丁目７７１－１他における倉庫建設に伴い福岡市教育委員会が平成１５年度に実施した蒲田部木原遺跡群第７次調査の報告書である。
2．本書に掲載した遺構実測図の作成は中村啓太郎、星野恵美、高木誠、上田龍二、安藤史郎、今井隆博が行った。
3．本書に掲載した遺物実測図の作成は中村、上田が行った。
4．本書に掲載した挿図の製図は林由紀子、今井が行った。
5．本書に掲載した遺構、遺物写真の撮影は中村が行った。
6．本調査に関わる記録、遺物等は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管される予定である。
7．付編として福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎氏による本調査出土の勾玉の石材についての調査報告を掲載している。
8．本書の執筆、編集は中村が行った。

本文目次

Ⅰ．はじめに……1
　１．調査に至る経過……1
　２．調査体制……1
Ⅱ．位置と環境……2
　１．位置と環境……2
　２．これまでの調査……3
Ⅲ．調査の記録……4
　１．調査概要……4
　２．調査の記録……4
Ⅳ．終わりに……25
付編　蒲田部木原遺跡群第７次調査出土勾玉の調査結果（比佐陽一郎）……26

Ⅰ．はじめに

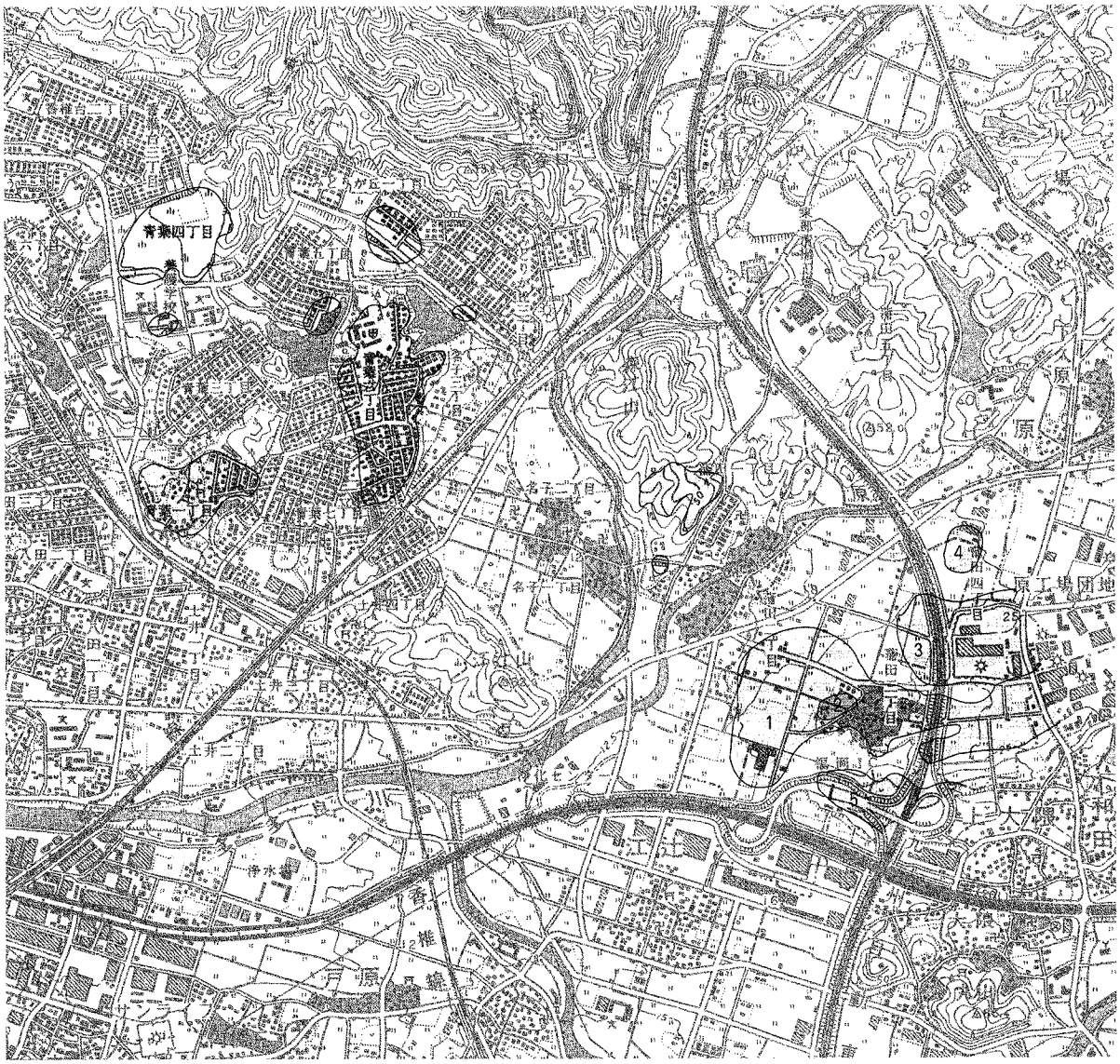
１．調査に至る経過

平成15年４月14日、内海サト氏より福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課へ倉庫建設に伴う福岡市東区蒲田３丁目771－1他における埋蔵文化財の事前審査について依頼がなされた。これを受けた埋蔵文化財課では事業計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地である蒲田部木原遺跡群に含まれることから試掘調査が必要であるとの判断がなされた。同年５月１日、試掘調査を行い、その結果、事業対象地に北側を中心に甕棺墓、溝、柱穴等の遺構が検出された。この成果をもとに協議を重ね、計画建物が当市内規の杭基準を満たしてないため全面調査が必要との判断がなされた。その後、建物計画者である株式会社キョーワから開発事前審査願いが提出され、建物基礎杭の間隔を広くとる設計変更案が出された。これを受け同年6月4日に北側部分の再試掘を行い、杭部分のみ記録保存のための発掘調査を行うこととなった。井上政実氏と福岡市の間で埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、調査は平成15年６月27日より開始した。例年にない長雨により当初契約期間より10日間程遅れた平成15年 ８ 月11日に終了した。

最後になりましたが、調査に際し、井上政実氏をはじめ多くの方々に多大なご理解とご協力を頂いた。記して感謝いたします。

２．調査体制

調査主体	福岡市教育委員会	
調査総括	埋蔵文化財課長	山口譲治　山崎純男（前任）
	調査第２係長	池崎譲二　田中寿夫（前任）
事前審査	事前審査係長	浜石哲也　池崎譲二（前任）
	主任文化財主事	吉留秀敏　米倉秀紀（前任）
	事前審査係	久住猛雄
調査庶務	文化財整備課管理係	御手洗清
調査担当	調査第２係	中村啓太郎　星野恵美
調 査 員	高木誠　上田龍児	
発掘作業	小川秀雄　徳永栄彦　宮崎雅秀　竹原吉秋　花田昌代　野田トヨ子　稲崎龍也	
	井上ヨシ子　田中フキ子　光安晶子　藤澤義一　園田豊　中村幸子　花田則子	
	阿部純子　崎村雄介　永松弘恵　安藤史郎　今井隆博	
整理作業	林由紀子　下川奈津代　釜崎法子　横山恵　原陽子　三栗野雅子	



1．蒲田部木原遺跡群　2．部木古墳群　3．蒲田水ヶ元遺跡　4．蒲田原遺跡　5．かけ塚遺跡

Fig.1 周辺遺跡分布図(1/25,000)

Ⅱ．位置と環境

1．位置と環境

蒲田部木原遺跡群は福岡市の東部、粕屋町との境、久原川と多々良川に挟まれた丘陵及び沖積地に立地する。この地域には本遺跡に接するように多くの遺跡が立地している。本調査地点の南に位置する部木古墳群は９基からなる古墳群であるが1998年の重要遺跡確認調査で周知の１号墳に加え、２号墳も前方後方墳であることが確認されている。北に接した蒲田水ヶ元遺跡では弥生時代中期の甕棺墓、弥生時代後期から古墳時代の竪穴住居、掘立柱建物、方形周溝遺構が確認されている。その北には蒲田原遺跡が位置する。南にはかけ塚遺跡群が位置し、弥生時代の甕棺墓、土壙墓、古墳時代の竪穴住居、中世の敷石遺構等が確認されている。

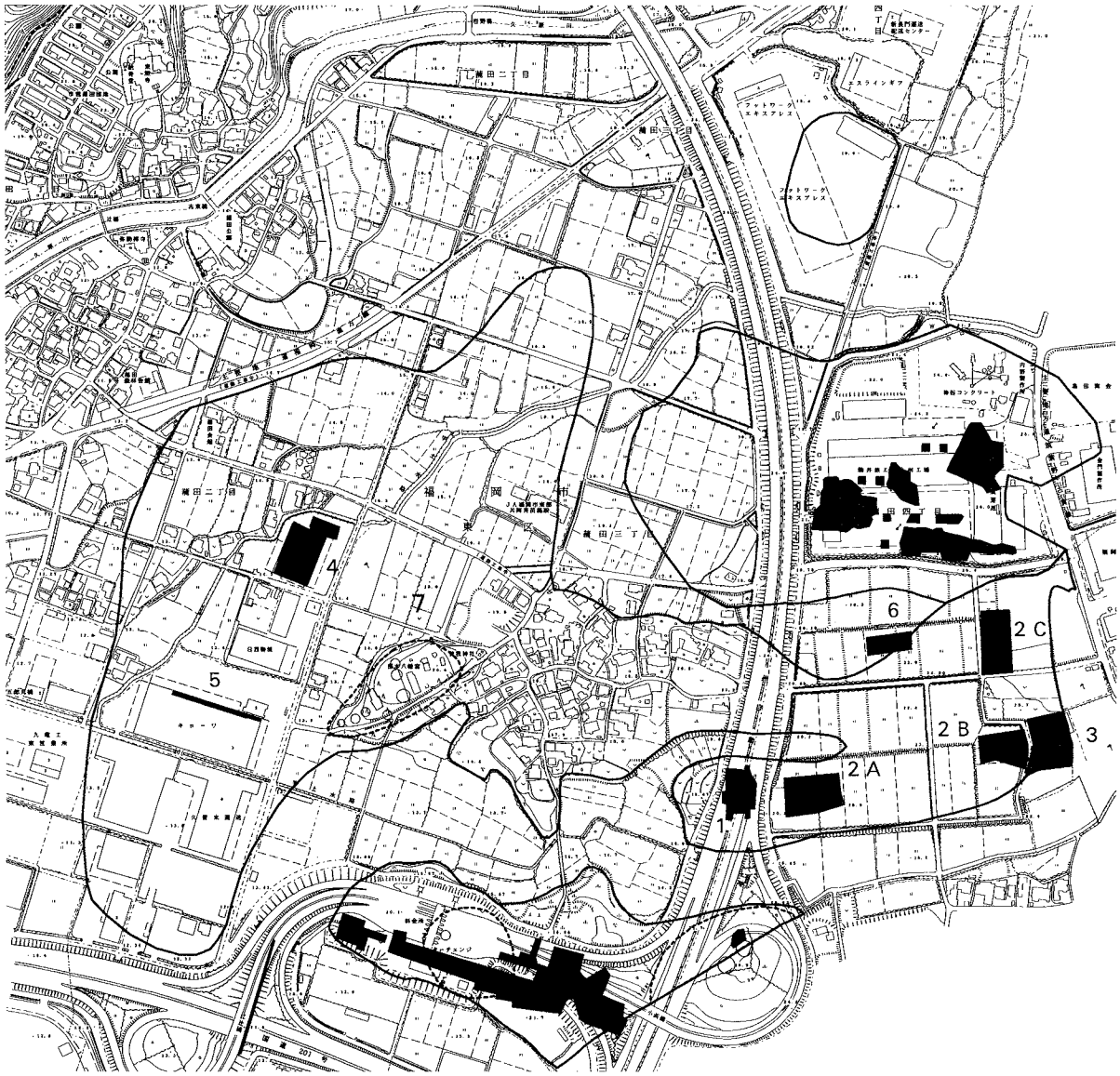


Fig. 2 第7次調査区位置図 (1/8, 000)

2．これまでの調査

第１次調査　九州縦貫自動車道建設に伴う調査。旧石器時代の包含層、土坑を検出している。

第２次調査　圃場整備に伴う調査。Ａ～Ｃ地区の３地点の調査を行い、Ａ区では古墳時代の竪穴住居、土坑、溝、Ｂ区では竪穴住居、掘立柱建物、土坑、土壙墓、柱穴、Ｃ区では竪穴住居、土坑、溝を検出している。

第３次調査　倉庫建設に伴う調査。２次調査Ｂ地区の東に隣接する。弥生時代後期～奈良時代の竪穴住居、掘立柱建物、土坑等を検出している。

第４次調査　倉庫建設に伴う調査。本調査地点の西に位置し、弥生時代前期～古墳時代の住居跡、掘立柱建物、土坑、溝を検出している。

第５次調査　倉庫建設に伴う調査。遺跡の東に位置する。建物基礎部分のみの調査で弥生時代中期～古墳時代の溝、土坑を検出している。またこれらの遺構に混入して縄文時代中期～晩期前半の遺物が出土しており、該期の集落の存在が推定されている。

第６次調査　倉庫建設に伴う調査。遺跡の東に位置し、掘立柱建物、溝、土坑、木棺墓（中世）、柱穴を検出している。

Ⅲ．調査の記録

１．調査概要

調査区は東区蒲田３丁目771－1他に所在し、遺跡群の西側、部木古墳群（部木八幡宮）の北に接して位置する。現況は水田である。調査は前述のように事業計画地の建物基礎杭部分のみを対象とし、甕棺墓が調査区外に延びる部分を拡張した。調査区は東からＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、北から１、２、３、４、５、６とし組み合わせて地区名とした。

基本層序は現地表から第１層　耕作土、第２層　黄褐色粘土（床土）、第３層　灰色粘質シルト、第４層　灰黄褐色粘土となり、遺構検出面の第４層上面で標高14.5mを測る。検出した遺構は甕棺墓10基、土壙墓１基、竪穴住居１軒、溝状遺構、柱穴等である。上層水田の影響で特に甕棺墓の掘方は検出が困難であった。

18地点を調査し、3地点の試掘を行った。調査面積は213.31㎡を測る。

２．調査の記録

Ａ－１区（Fig.4　Ph.2）

調査対象地の北東隅に位置する。検出した遺構は甕棺墓１基、溝２条である。

ST-43（Fig.5・6　Ph.3・4）

単棺の甕棺墓である。墓壙は長さ75cm、幅62cm、深さ23cmを測る。棺は土圧により上部が押し潰さ

Ph.1 調査区全景（西から）

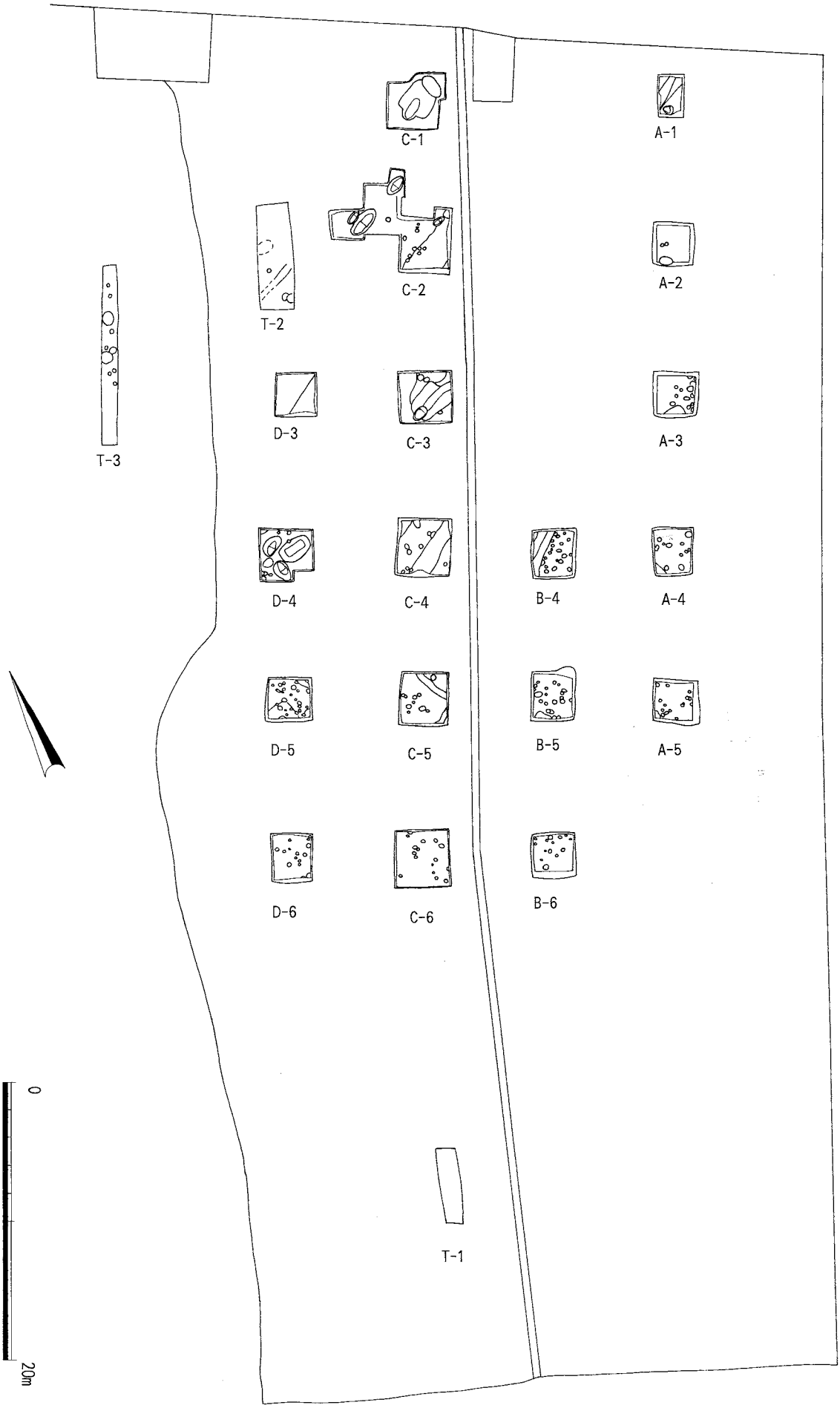


Fig.3 遺構配置図(1/400)

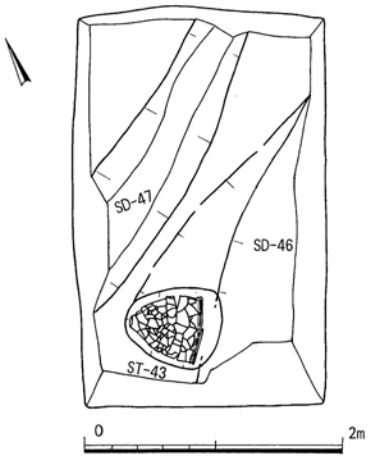
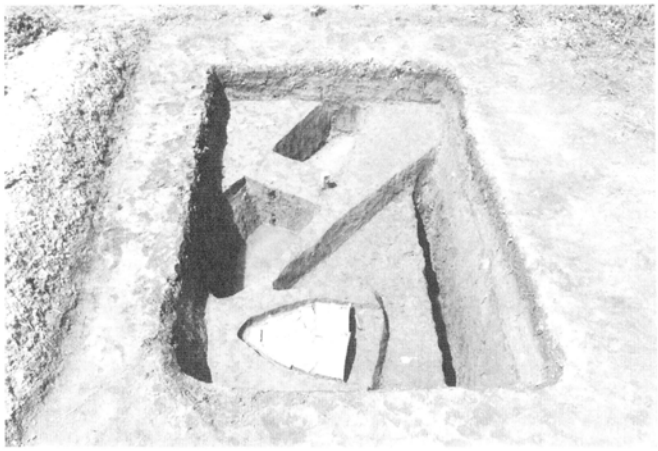


Fig.4 A-1区遺構配置図(1/60)



Ph.2 A-1区(南から)

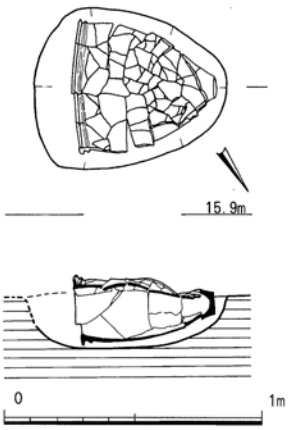
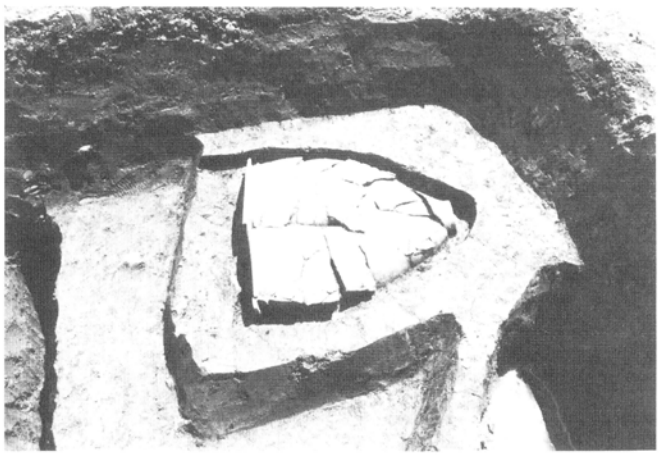


Fig.5 ST-43実測図(1/30)



Ph.3 ST-43(北から)

れた状態で出土した。主軸をN－122°－Eにとり、埋置角ほぼ水平。

棺(1)は口径39.8cm、器高51.4cmを測る甕で、口縁部は逆L字状を呈し端部を丸く収める。口縁部下に1条の三角凸帯を付す。調整は口縁部内外がヨコナデ、胴部外面が縦ハケ、内面がナデを施す。

SD-46 (Fig.4 Ph.2)

東西方向に延びる溝である。ST-43との切り合いは分かり難いが弥生時代中期後半の土器が出土しており後出するものと思われる。

SD-47 (Fig.4 Ph.2)

SD-46の北に位置し、東西方向に延びる。幅35cm、深さ30cmを測る。弥生時代中期後半の土器が出土している。

A－2区 (Fig.7 Ph.5)

調査対象地の北東、A－1区の南に位置する。検出した遺構は柱穴である。いずれも遺物の出土はなく時期不明。

A－3区 (Fig.8 Ph.6)

調査対象地の北東、A－2区の南に位置する。検出した遺構は土坑、柱穴である。SP-44から弥生土器の細片が出土している。

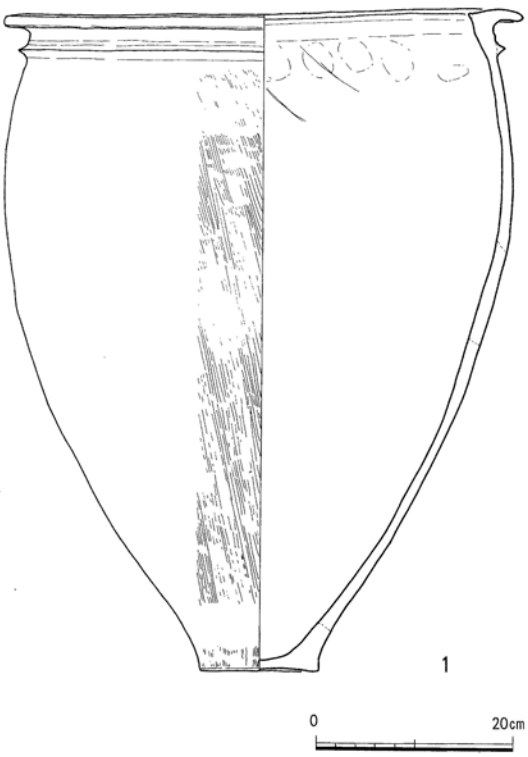
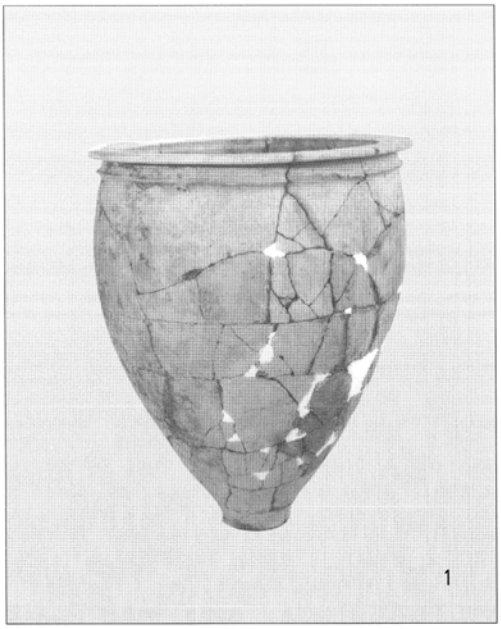


Fig. 6 ST-43甕棺実測図 (1/8)



Ph. 4 ST-43甕棺

A－4区 (Fig. 8　Ph. 7)

調査対象地の北東、A－3区の南に位置する。検出した遺構は溝あるいは土坑（調査区隅のため性格不明）、柱穴である。SP-35、36から弥生土器の細片が出土している。

A－5区 (Fig. 8　Ph. 8)

調査対象地の北東、A－4区の南に位置する。検出した遺構は柱穴である。いずれも遺物の出土はなく時期不明。

B－4区 (Fig. 9　Ph. 9)

A－4区の西に位置する。検出した遺構は溝1条、柱穴である。溝は出土遺物が無く、時期不明であるが、覆土が灰色を呈することから比較的新しいとおもわれる。SP-37、38から弥生土器の細片が出土している。尚、B－1～3区に相当する地点は試掘により攪乱が確認されたため調査は行っていな

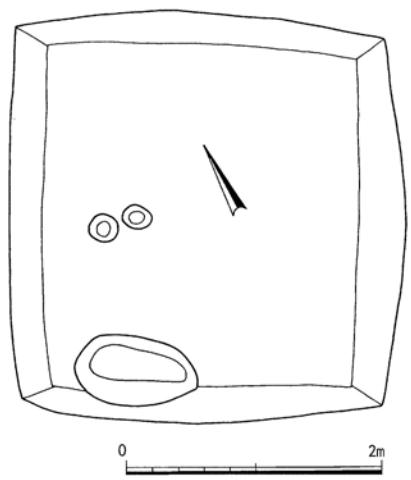
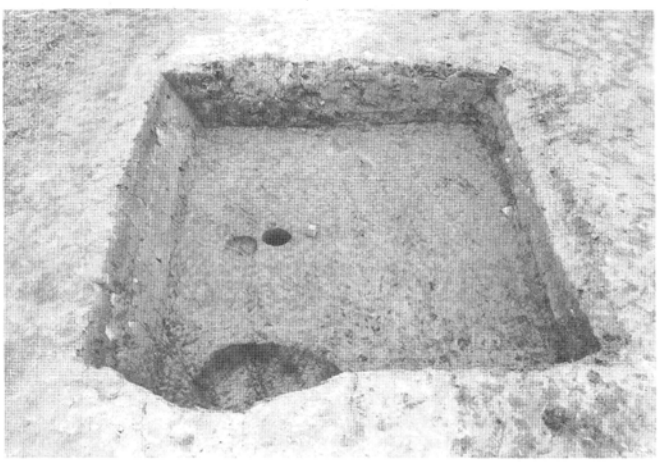
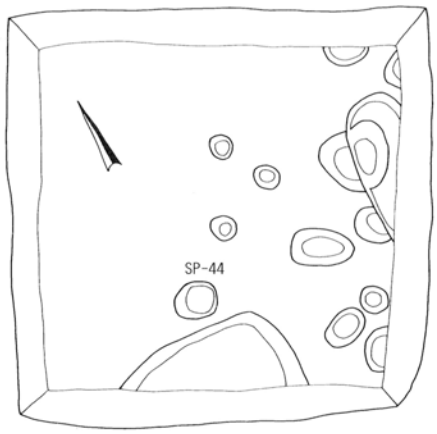


Fig. 7 A-2区遺構配置図 (1/60)

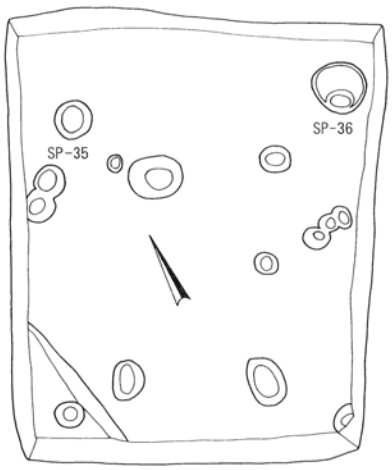


Ph. 5 A-2区 (南から)

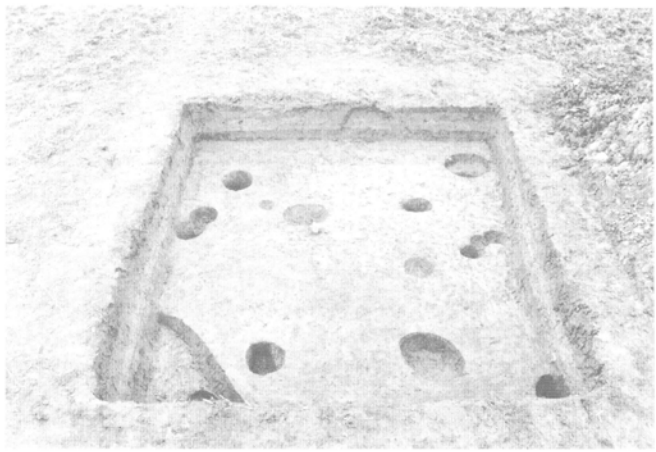


A-3区

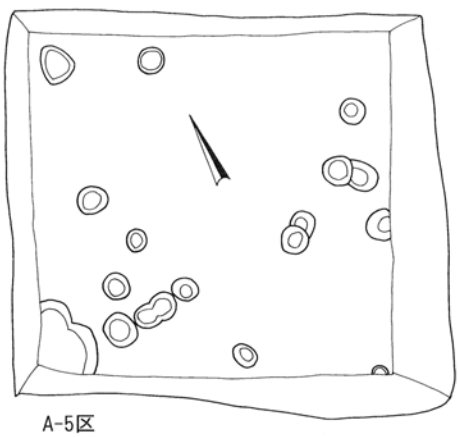
Ph. 6 A-3区（南から）



A-4区

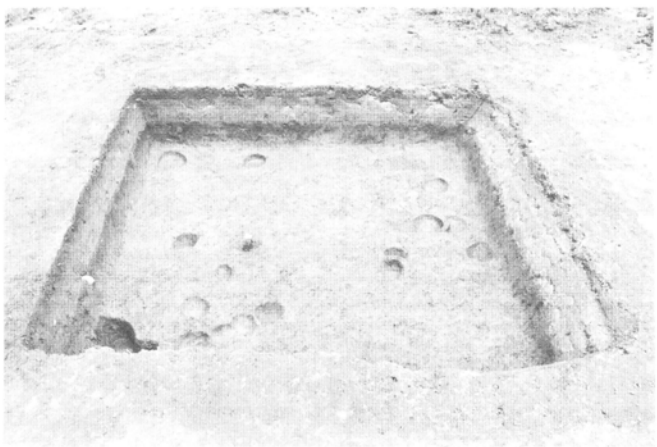


Ph. 7 A-4区（南から）

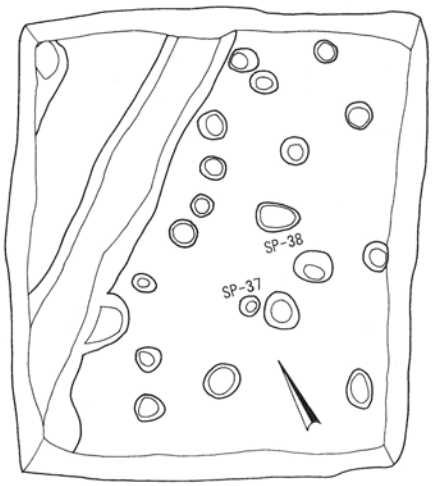


A-5区

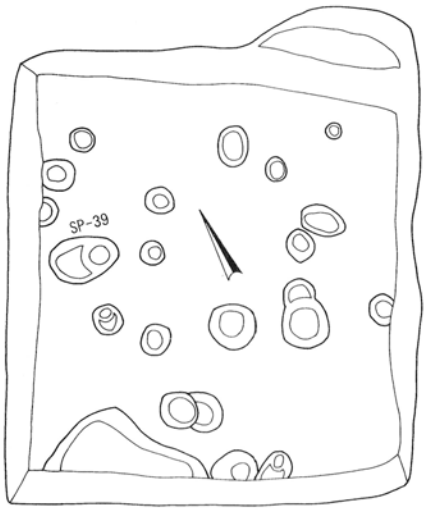
Fig. 8 A-3·4·5区遺構配置図（1/60）



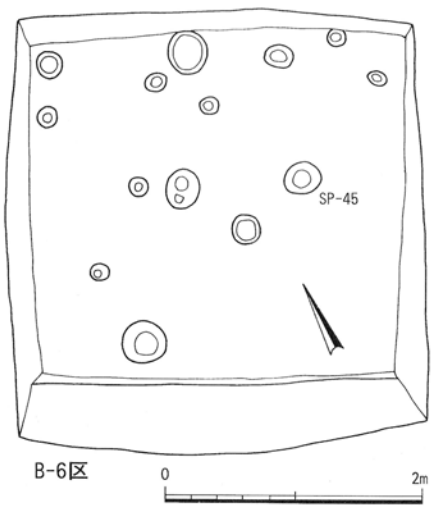
Ph. 8 A-5区（南から）



B-4区

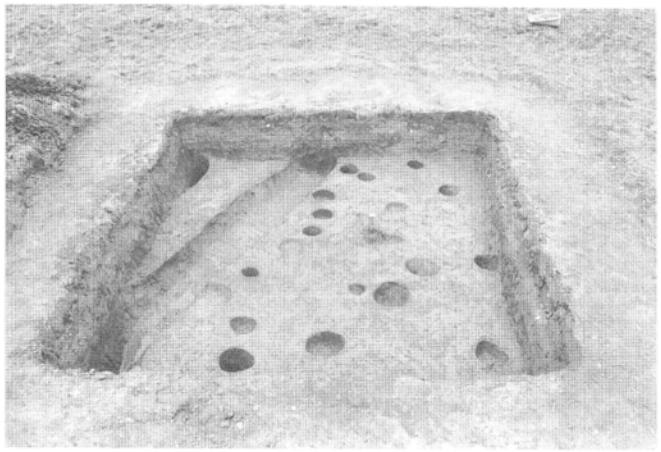


B-5区

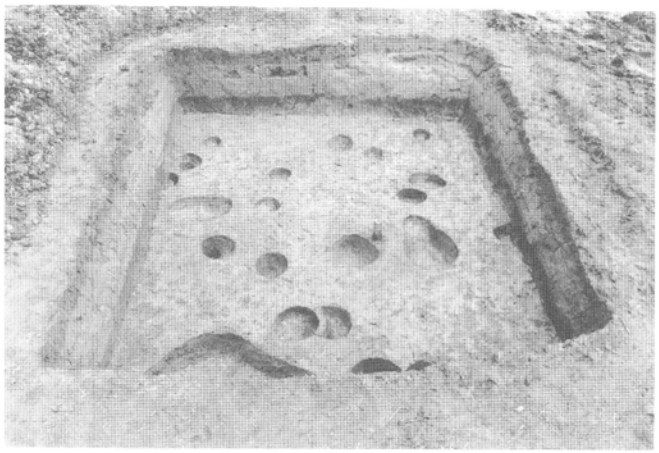


B-6区

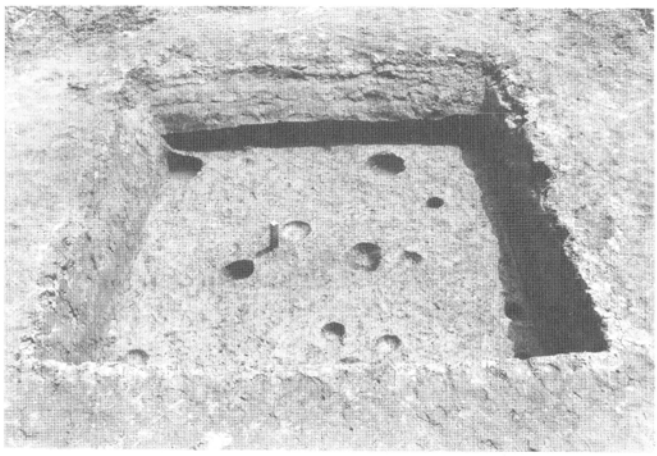
Fig. 9 B-4·5·6区遺構配置図 (1/60)



Ph. 9 B-4区 (南から)



Ph. 10 B-5区 (南から)



Ph. 11 B-6区 (北から)

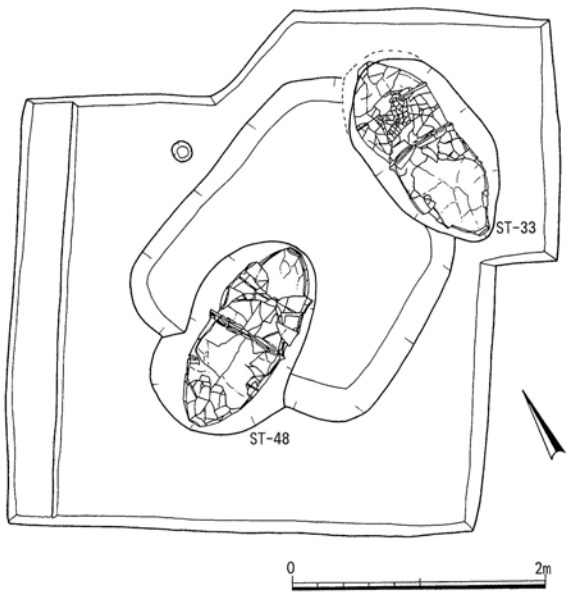
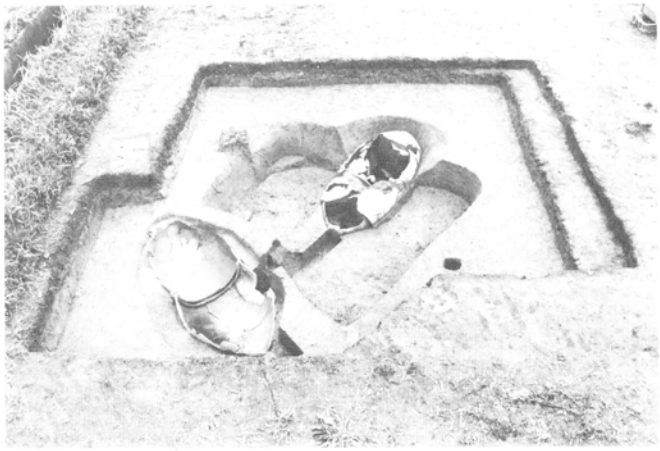


Fig.10 C-1区遺構配置図(1/60)



Ph.12 C-1区(西から)

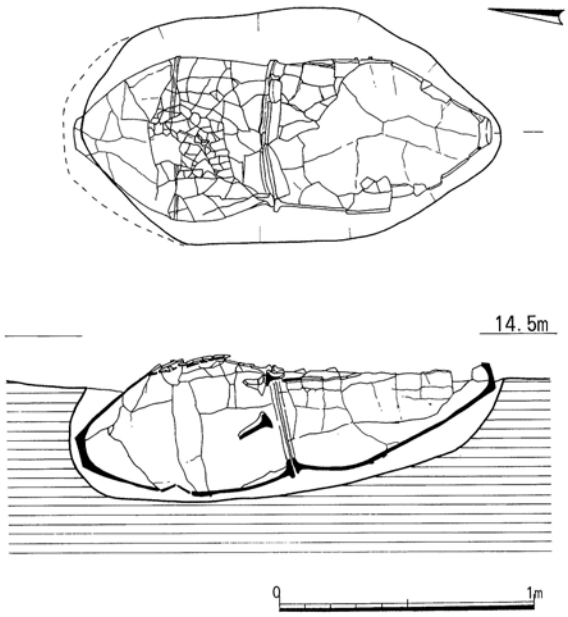
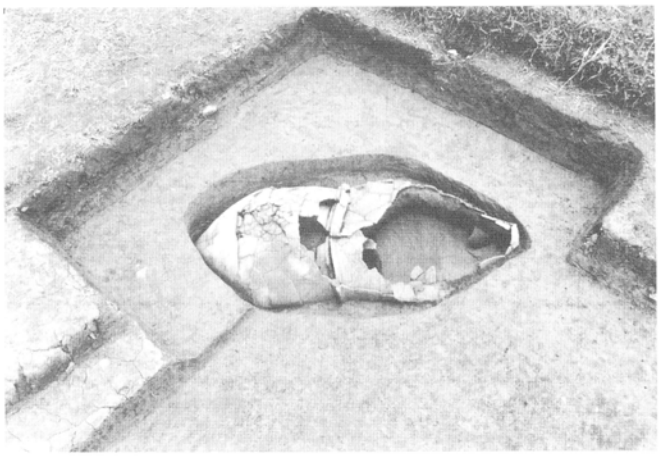


Fig.11 ST-33実測図(1/30)



Ph.13 ST-33(西から)

い。

B－5区 (Fig.9　Ph.10)

B－4区の南に位置する。検出した遺構は土坑、柱穴である。SP-39から弥生土器の細片が出土している。

B－6区 (Fig.9　Ph.11)

B－5区の南に位置する。検出した遺構は土坑、柱穴である。SP-45から弥生土器の細片が出土している。

C－1区 (Fig.10　Ph.12)

調査対象地の北に位置する。検出した遺構は甕棺墓2基である。調査区北東隅に位置するST-33が

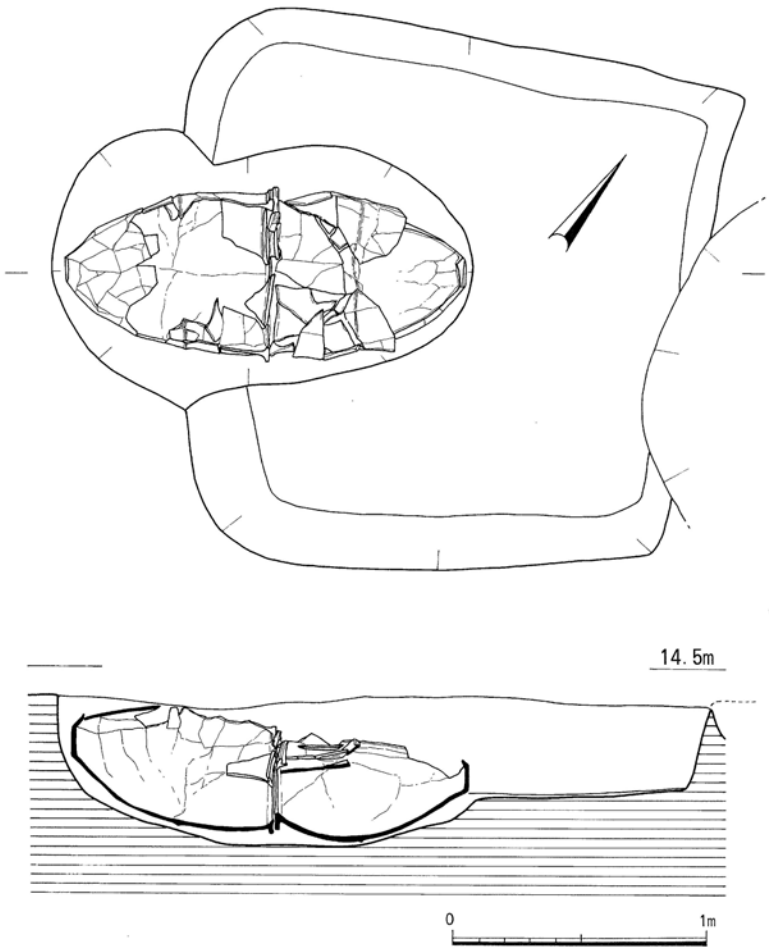
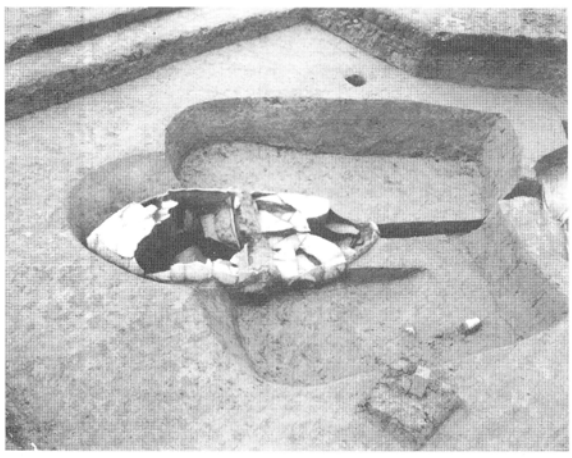


Fig.12 ST-48実測図(1/30)



Ph.14 ST-48(南から)

調査区外に延びるため一部拡張した。

ST-33 (Fig.11・13　Ph.13・15)

ST-48の墓壙を切って位置する接口式の甕棺墓である。墓壙は上層の水田の影響で分かりづらく、甕棺自体が確認される高さにおいても検出が困難であった。このためやや不正確な可能性がある。棺は表土直下に位置するため試掘の際、上部を削ってしまった。主軸をN－163°－Eにとり、埋置角10°を測る。

上甕(2)は復元口径58cm、器高76cm程度を測る。口縁部はT字状を呈し、胴部は張り、中位に三角凸帯を2条付す。調整は口縁部、凸帯付近がヨコナデ、胴部は風化により不明。

下甕(3)は口径56.2cm、器高78.5cmを測る。口縁部はT字状を呈し、内に傾く。胴部は張り、中位に三角凸帯を1条付す。調整は口縁部、凸帯付近がヨコナデ、胴部は風化により不明。

ST-48 (Fig.12・13　Ph.14・15)

ST-33に墓壙を切られて位置する接口式の甕棺墓である。墓壙は長さ260cm、幅221cm、深さ60cmを測

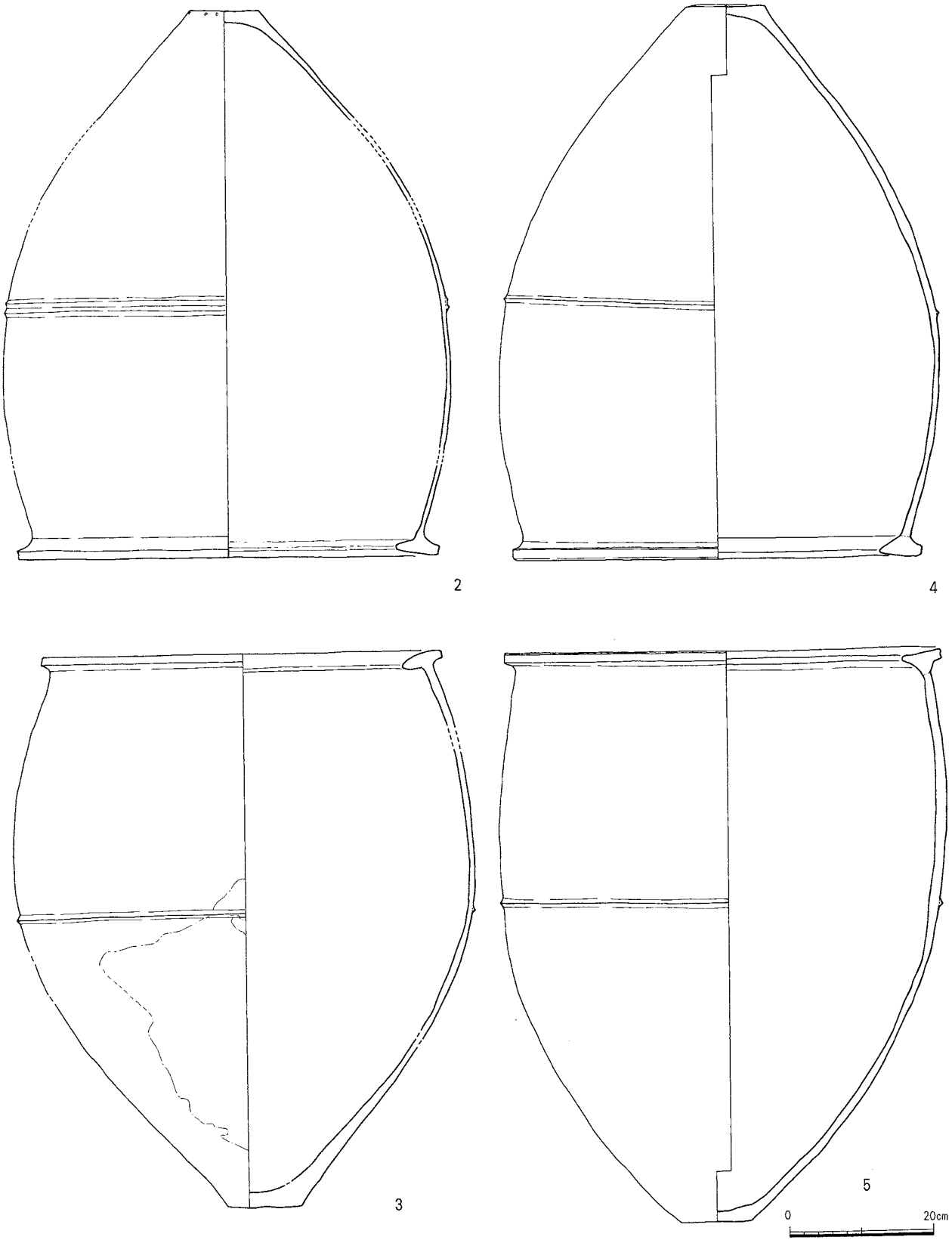
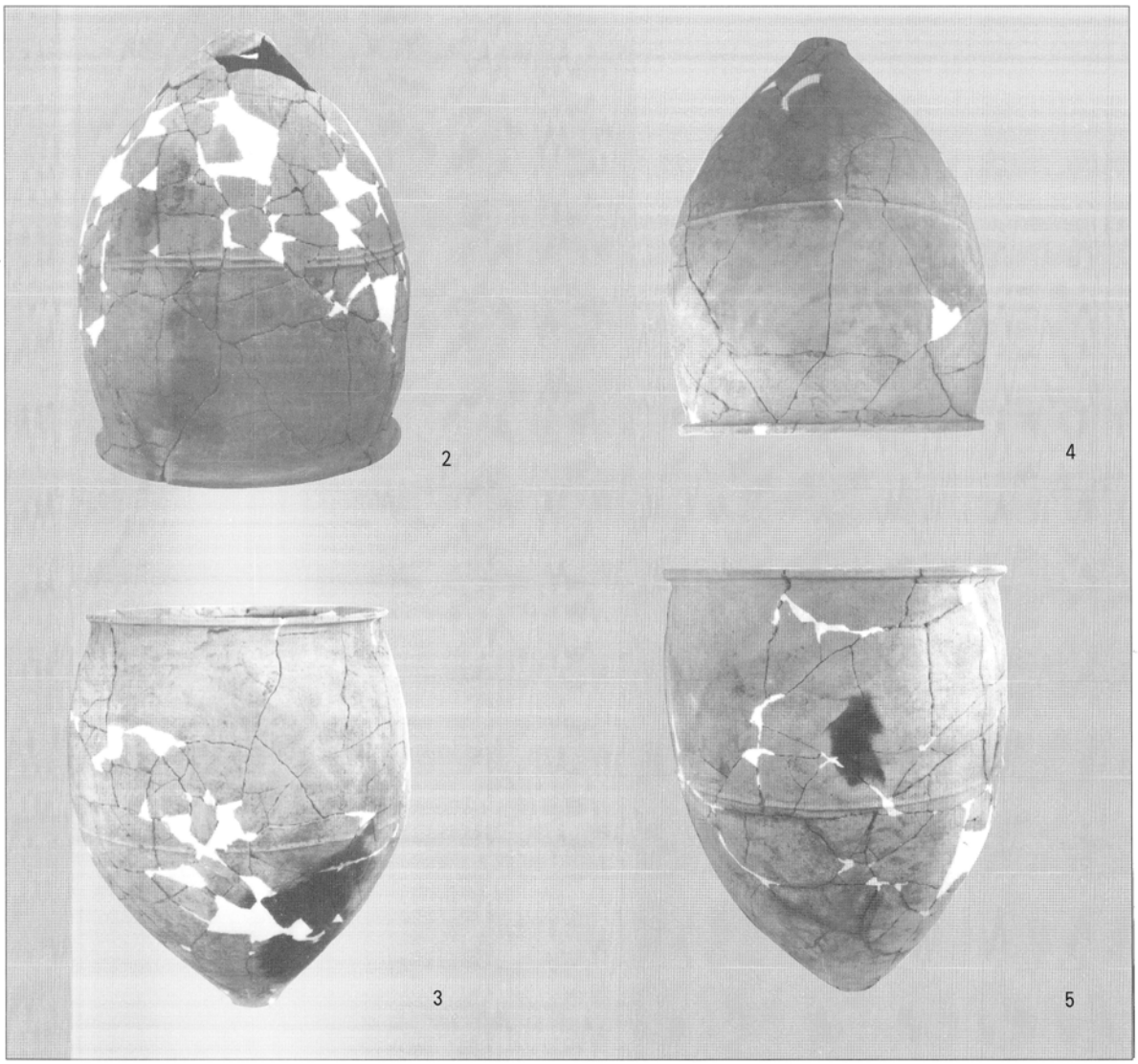


Fig.13 ST-33·48甕棺実測図(1/8)



Ph.15 ST-33・48甕棺

る。主軸をN－52°－Eにとり、埋置角はほぼ水平。

上甕(4)は口径56.6cm、器高76.6cmを測る。口縁部はT字状を呈し肥厚する。胴部は砲弾形で中位に三角凸帯を1条付す。調整は口縁部、凸帯付近がヨコナデ、胴部は風化により不明。

下甕(5)は口径61.9cm、器高81.0cmを測る。口縁部はT字状を呈し肥厚する。胴部は砲弾形で中位に三角凸帯を1条付す。調整は口縁部、凸帯付近がヨコナデ、胴部は風化により不明。

C－2区（Fig.14　Ph.16・17）

C－1区の南に位置する。検出した遺構は甕棺墓5基、溝1条、柱穴である。試掘時に建物基礎杭部分の北西に甕棺墓が存在することが確認されたため大きく拡張した。

ST-40（Fig.15・16　Ph.18・21）

C－2区拡張区西側に位置する接口式の甕棺墓である。棺は土圧により上部が押し潰され、上甕と下甕の口縁部はやや離れた状態で出土した。墓壙は北側をST-41に切られる。長さ226cm、幅106cm、深さ50cmを測る。主軸をN－81°－Eにとり、埋置角はほぼ水平。

上甕(6)は口径62.8cm、器高91.8cmを測る。口縁部は内側が肥厚し外傾する。胴部は砲弾形で中位に三角凸帯を2条付す。調整は口縁部、凸帯付近がヨコナデ、胴部は風化により不明。

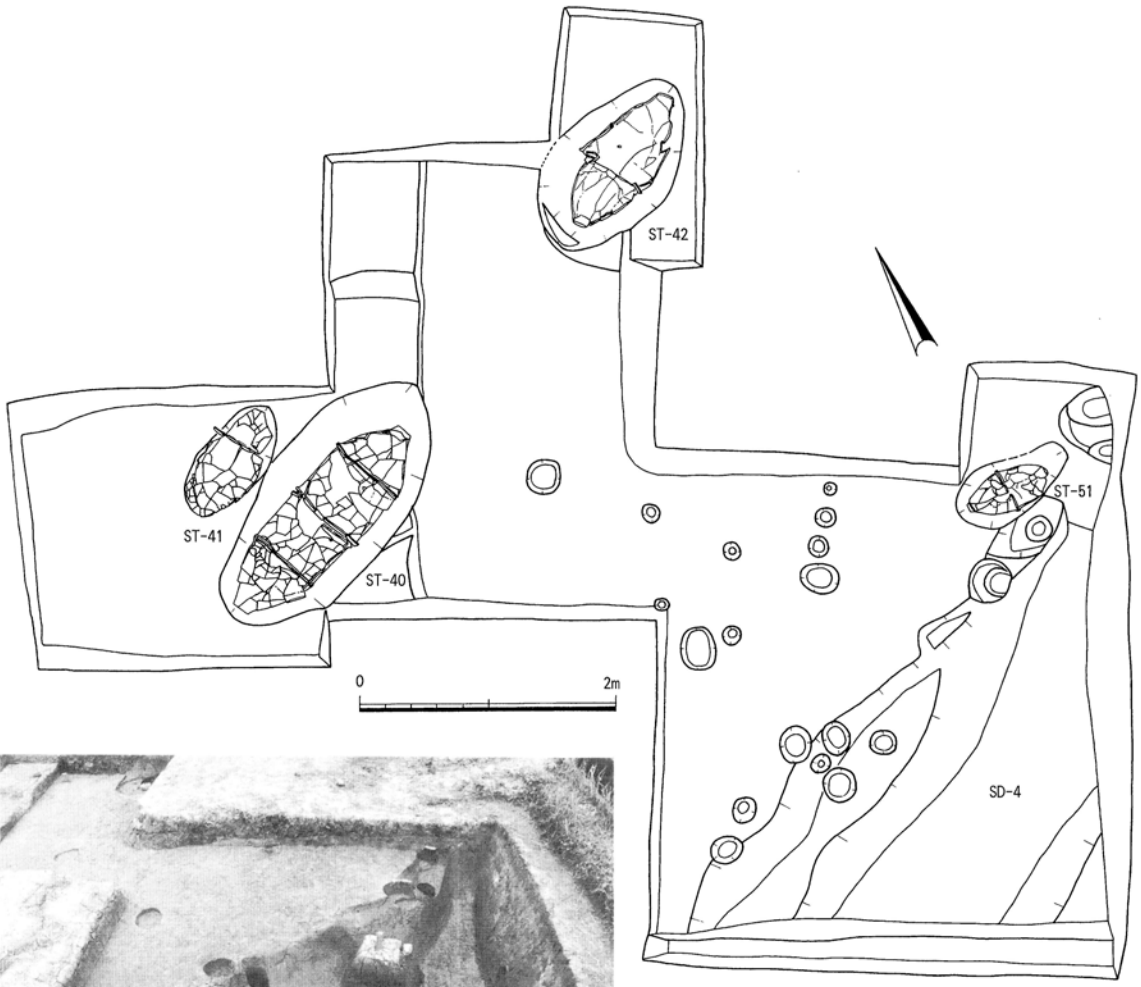


Fig. 14 C-2区遺構配置図 (1/60)

Ph. 16 C-2区 (南から)

Ph. 17 C-2区拡張区 (南から)

下甕(7)は口径61.8cm、器高95.2cmを測る。口縁部は内側が肥厚し大きく張り出す。胴部は砲弾形で中位に三角凸帯を2条付す。調整は口縁部、凸帯付近がヨコナデ、胴部は風化により不明。

ST-41 (Fig. 15・16　Ph. 18・21)

C－2区拡張区西側にST-40を切って位置する接口式の甕棺墓である。棺は削平により下部を残すのみである。主軸をN－62°－Eにとる。

上甕(8)は復元口径 43.0cmを測る。口縁部は逆L字状を呈し、内側が小さく張り出し、外側端部を丸く収める。口縁部下に1条の三角凸帯を付す。調整は口縁部、凸帯付近がヨコナデ、他は風化により不明。

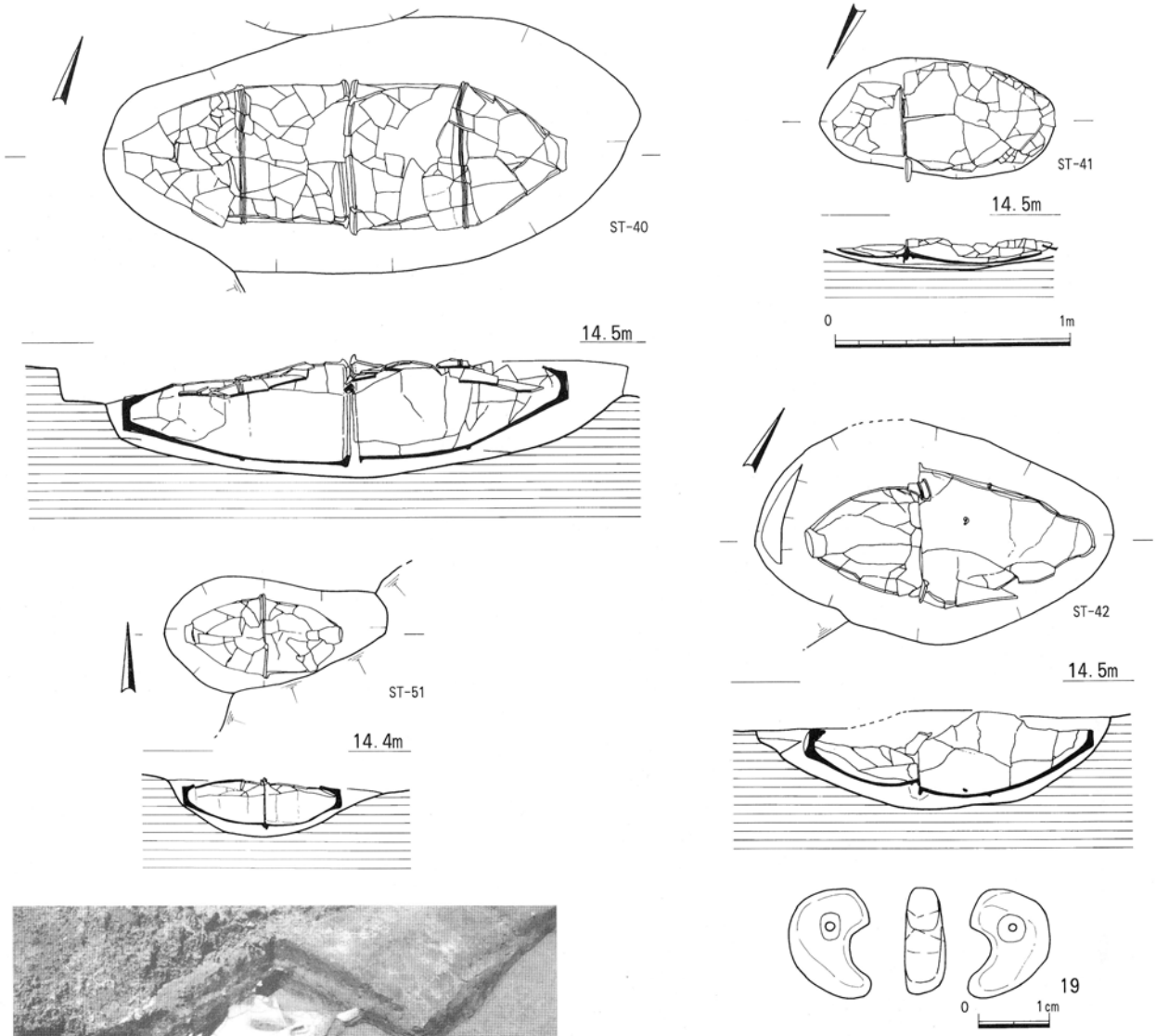
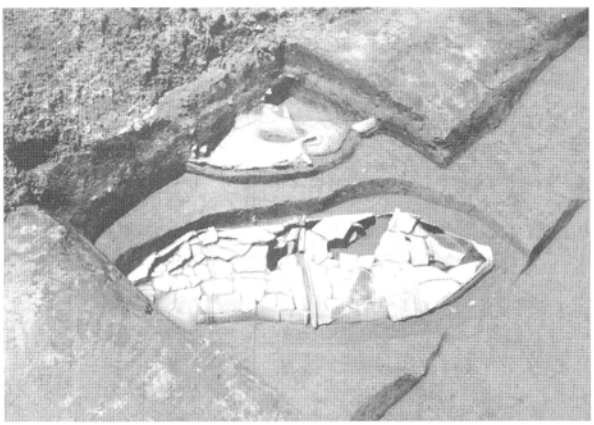
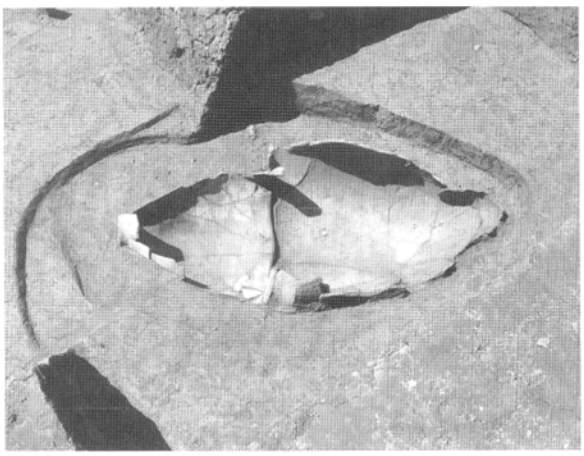


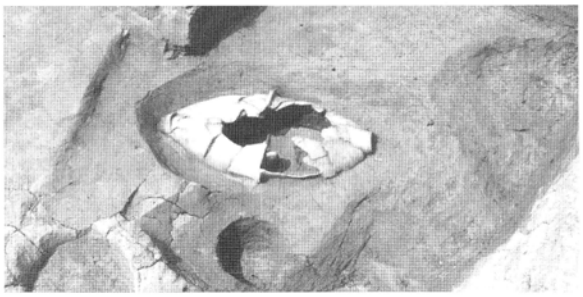
Fig. 15 ST-40·41·42·51実測図及びST-42出土遺物実測図(1/30·1/1)



Ph. 18 ST-40·41(南から)



Ph. 19 ST-42(南から)



Ph. 20 ST-51(南から)

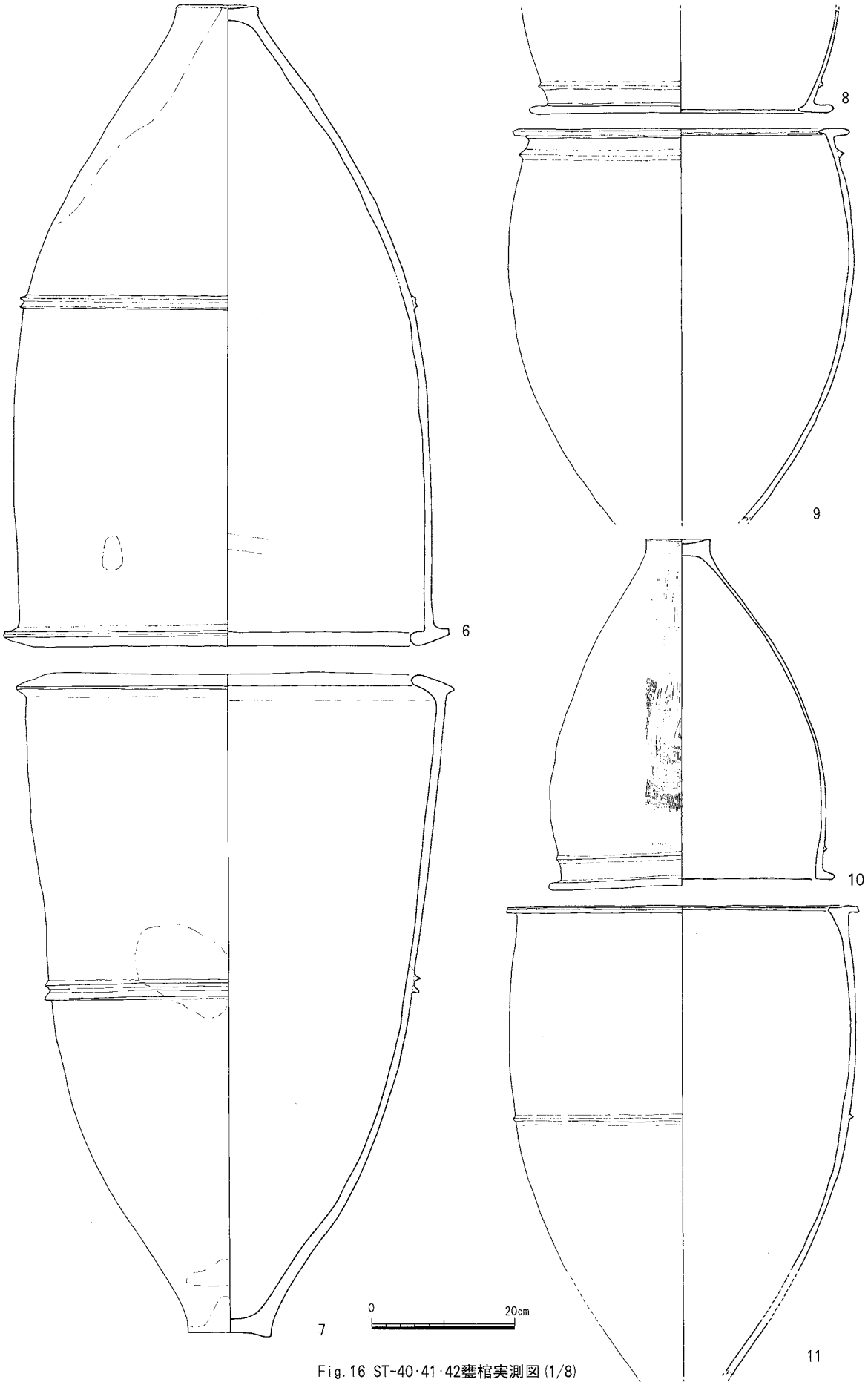


Fig. 16 ST-40·41·42甕棺実測図 (1/8)

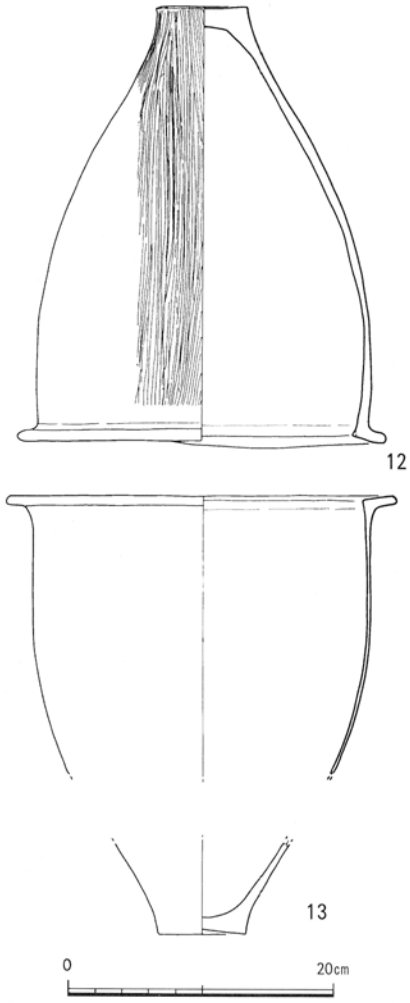
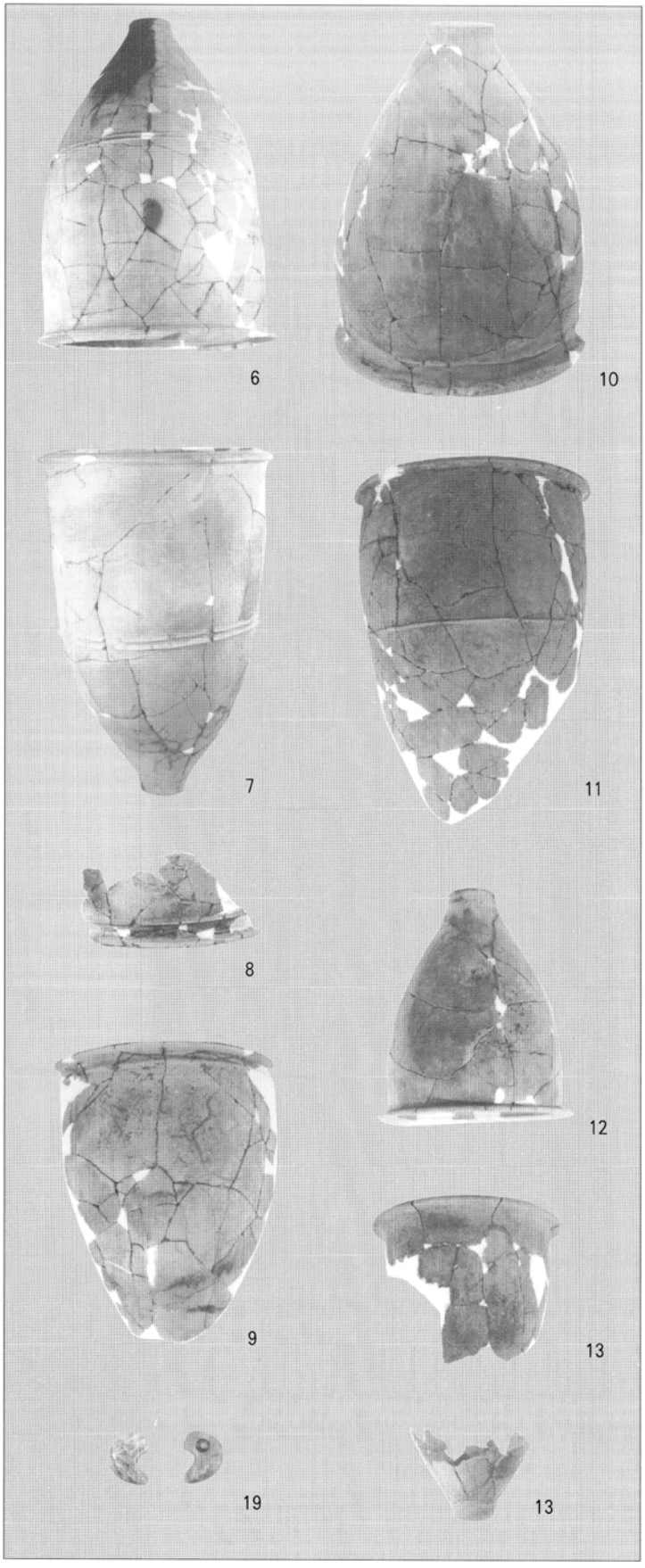


Fig.17 ST-51甕棺実測図(1/6)



Ph.21 ST-40·41·42·51甕棺及びST-42出土遺物

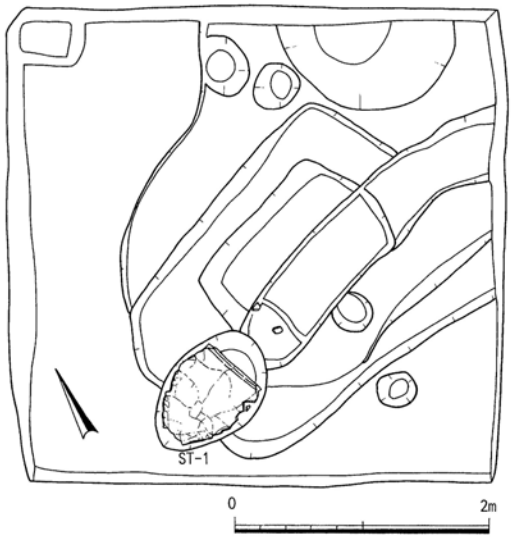
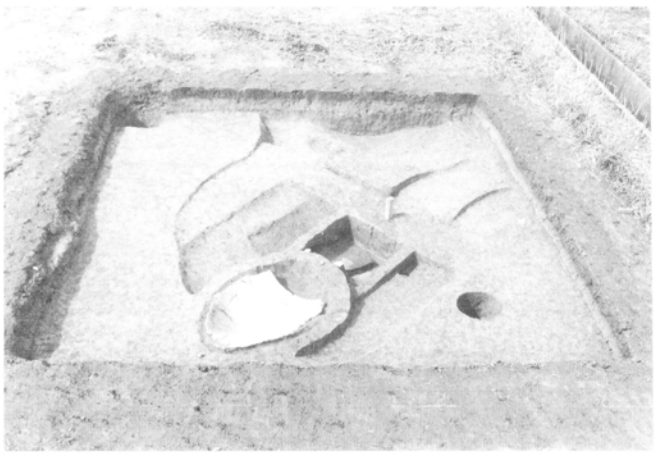


Fig.18 C-3区遺構配置図(1/60)



Ph.22 C-3区(南から)

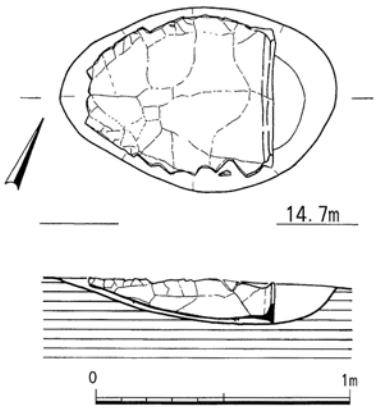


Fig.19 ST-1実測図(1/30)

Ph.23 ST-1(南から)

下甕(9)は復元口径 48.0cmを測る。口縁部は逆L字状を呈し、内側が小さく張り出し、外側端部を丸く収める。口縁部下に1条の三角凸帯を付す。調整は口縁部、凸帯付近がヨコナデ、他は風化により不明。

ST-42 (Fig.15・16　Ph.19・21)

C－2区拡張区北側に位置する合口式の甕棺墓である。合口部には目張りの粘土が施される。墓壙は長さ153cm、幅94cm、深さ42cmを測る。主軸をN－119°－Wにとり、埋置角はほぼ水平。

上甕(10)は口径40.6cm、器高50.1cmを測る。口縁部は逆L字状を呈し、外側端部を丸く収める。口縁部下に1条の三角凸帯を付す。調整は口縁部、凸帯付近がヨコナデ、胴部外面が縦ハケ、内面がナデを施す。

下甕(11)は復元口径50.0cmを測る。口縁部は逆L字状を呈し、胴部中位に三角凸帯を付す。調整は口縁部、凸帯付近がヨコナデ、他は風化により不明。また棺内より副葬品として翡翠製の勾玉(19)が出土した。

ST-51 (Fig.15・17　Ph.20・21)

C－2区に位置しSD-4に切られる接口式の甕棺墓である。墓壙は長さ95cm、幅50cm、深さ25cmを測る。主軸をN－89°－Wにとり、埋置角はほぼ水平。

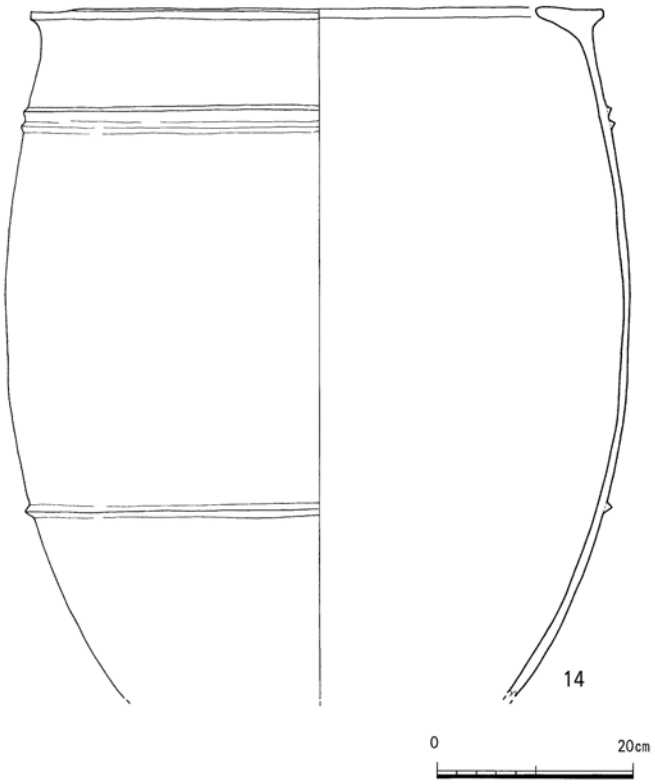
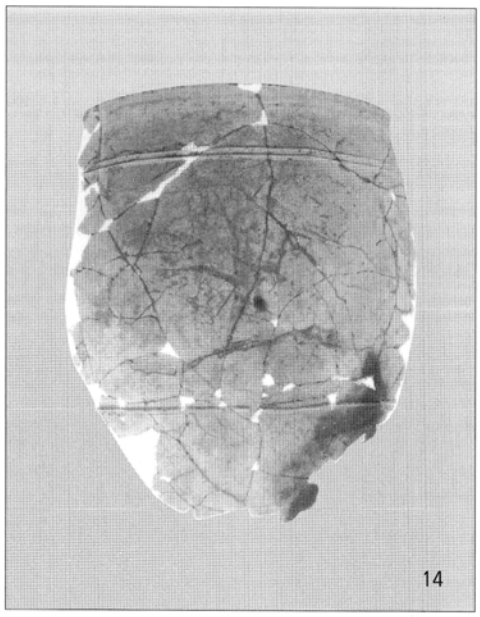


Fig. 20 ST-1甕棺実測図 (1/8)



Ph. 24 ST-1甕棺

上甕(12)は口径28. 3cm、器高34. 3cmを測る。口縁部は内傾した逆Ｌ字状を呈し、胴部はあまり張らず底部へ至る。調整は口縁部が内外面ともヨコナデ、以下外面は縦ハケ、内面はナデを施す。

下甕(13)は復元口径30. 0cm、器高35cm程度を測る。口縁部は内傾したＬ字状を呈し、胴部はあまり張らず底部へ至る。調整は器面の著しい風化により不明。

SD-4 (Fig. 14　Ph. 16)

東西方向に延びる溝である。ST-51を切る。幅230cm前後、深さ50cmを測る。弥生時代中期後半の土器片が出土している。

Ｃ－３区 (Fig. 18　Ph. 22)

Ｃ－２区の南に位置する。検出した遺構は甕棺墓、土坑、溝である。

ST-1 (Fig. 19・20　Ph. 23・24)

単棺の甕棺墓である。墓壙は長さ110cm、幅73cm、深さ16cmを測る。棺は削平により下部を残すのみである。主軸をＮ－64°－Eにとる。

甕(14)は復元口径58. 4cmを測る。口縁部は内側に大きく張り出す。僅かに外傾し、胴部は丸みを帯びる。底部は欠損している。凸帯は口縁下10cmの所に２条の三角凸帯と胴部最大径より15cm程下に１条の三角凸帯を付す。調整は口縁部、凸帯付近がヨコナデ、他は器面の風化により不明。

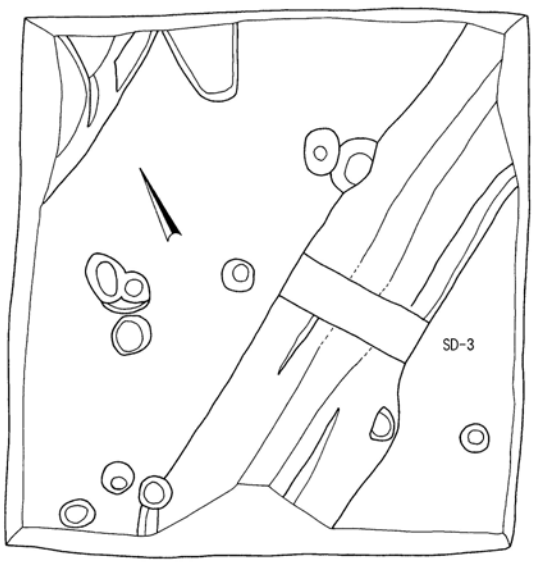
Ｃ－４区 (Fig. 21　Ph. 25)

Ｃ－３区の南に位置する。検出した遺構は溝、柱穴である。

SD-3 (Fig. 21・22　Ph. 25)

東西方向に延びる溝である。幅110～130cm、深さ76cmを測る。弥生時代中期後半の土器片が出土している。

Ｃ－５区 (Fig. 21　Ph. 26)



C－4区

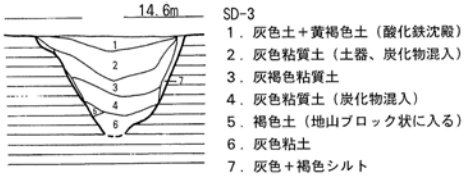
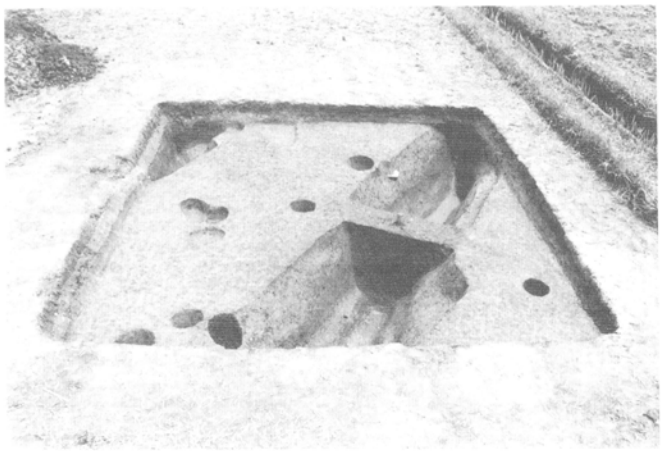
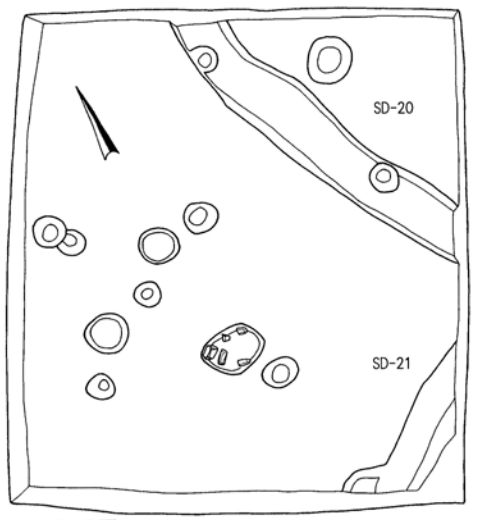


Fig. 22 SD-3土層実測図 (1/60)



Ph. 25 C-4区 (南から)



C－5区

Ph. 26 C-5区 (南から)

0 2m

Fig. 21 C-4·5区遺構配置図 (1/60)

C－4区の南に位置する。検出した遺構は溝、柱穴である。

SD-20 (Fig. 21　Ph. 26)

南北方向に延びる溝である。幅40cm、深さ10cmを測る。弥生土器の細片が出土している。

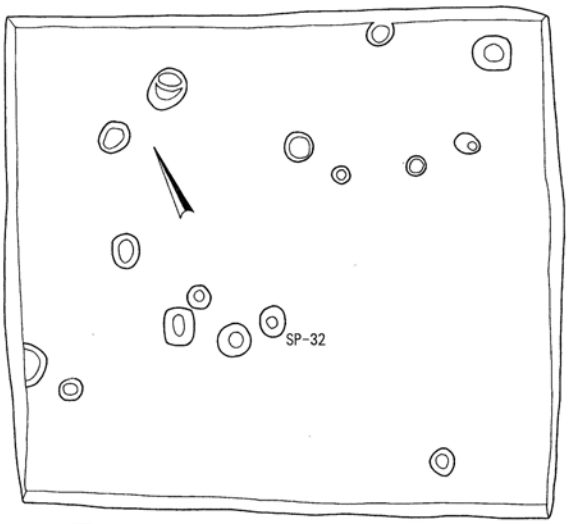
SD-21 (Fig. 21　Ph. 26)

東西方向に延びる溝とおもわれる。調査区南東隅にかかるため、規模は不明。弥生土器の細片が出土している。

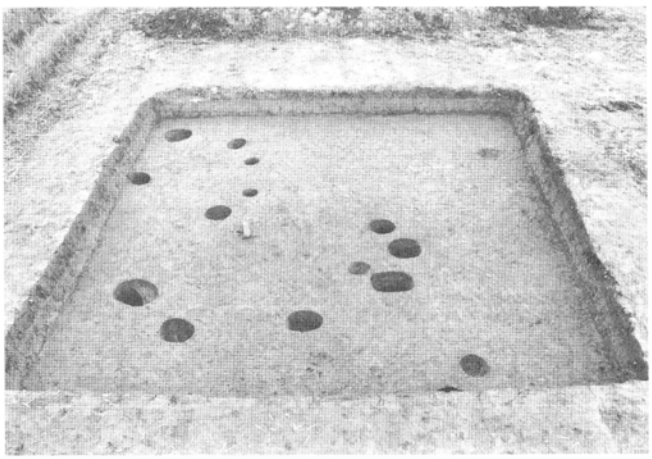
C－6区 (Fig. 23　Ph. 27)

C－5区の南に位置する。検出した遺構は柱穴である。SP-32から弥生土器の細片が出土しているが、時期は不明。

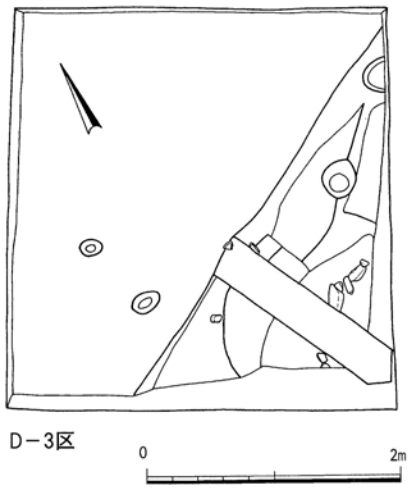
D－3区 (Fig. 23　Ph. 28)



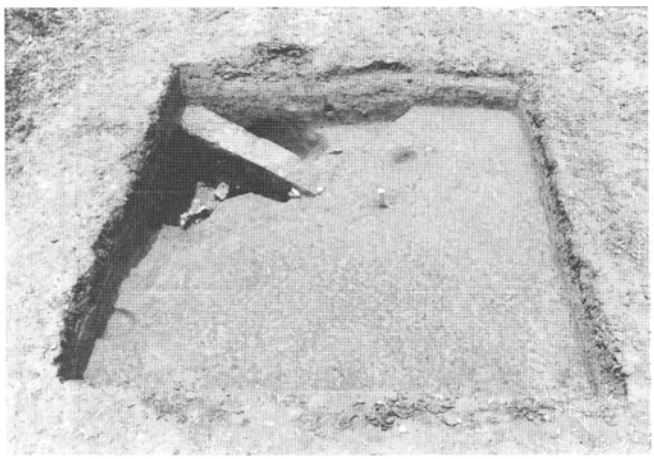
C－6区



Ph. 27 C-6区（西から）



D－3区



Ph. 28 D-3区（北から）

Fig. 23 C-6・D-3区遺構配置図（1/60）

Ｃ－３区の西に位置する。検出した遺構は溝、柱穴である。溝はＣ－２区のSD-4に続くものとおもわれる。

Ｄ－４区（Fig. 24　Ph. 29）

Ｄ－３区の南に位置する。検出した遺構は甕棺墓２基、土壙墓１基、土坑、柱穴である。

SK-23（Fig. 25　Ph. 30）

２段掘りの土壙墓で平面形は長方形を呈する。墓壙は１段目が長さ234cm、幅152cm、深さ20cm、２段目が長さ200cm、幅91cm、深さ40cmを測る。木棺の痕跡が残り粘土で目張りを行う。木棺は長さ140cm、幅50cm程度で棺蓋は１枚であろう。主軸をＮ－80°－Eにとる。出土遺物には甕棺墓より古い遺物も見られるが時期は決め難い。甕棺墓に若干先行するものではないかとおもわれる。

ST-24（Fig. 25・26　Ph. 31・33）

SK-23の西に位置する接口式の甕棺墓である。墓壙は長さ152cm、幅92cm、深さ30cmを測る。主軸をＮ－53°－Eにとり、埋置角はほぼ水平。

上甕(15)は器高50. 6cm、口径41. 0cmを測る。口縁部は逆Ｌ字状を呈す。口縁部下に１条の三角凸帯

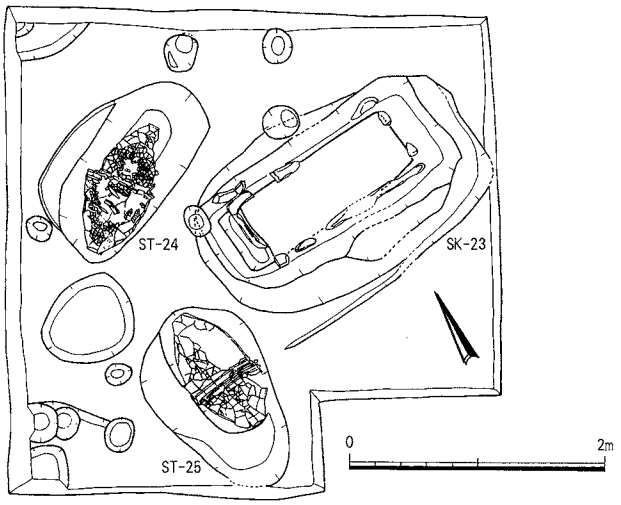


Fig. 24 D-4区遺構配置図 (1/60)

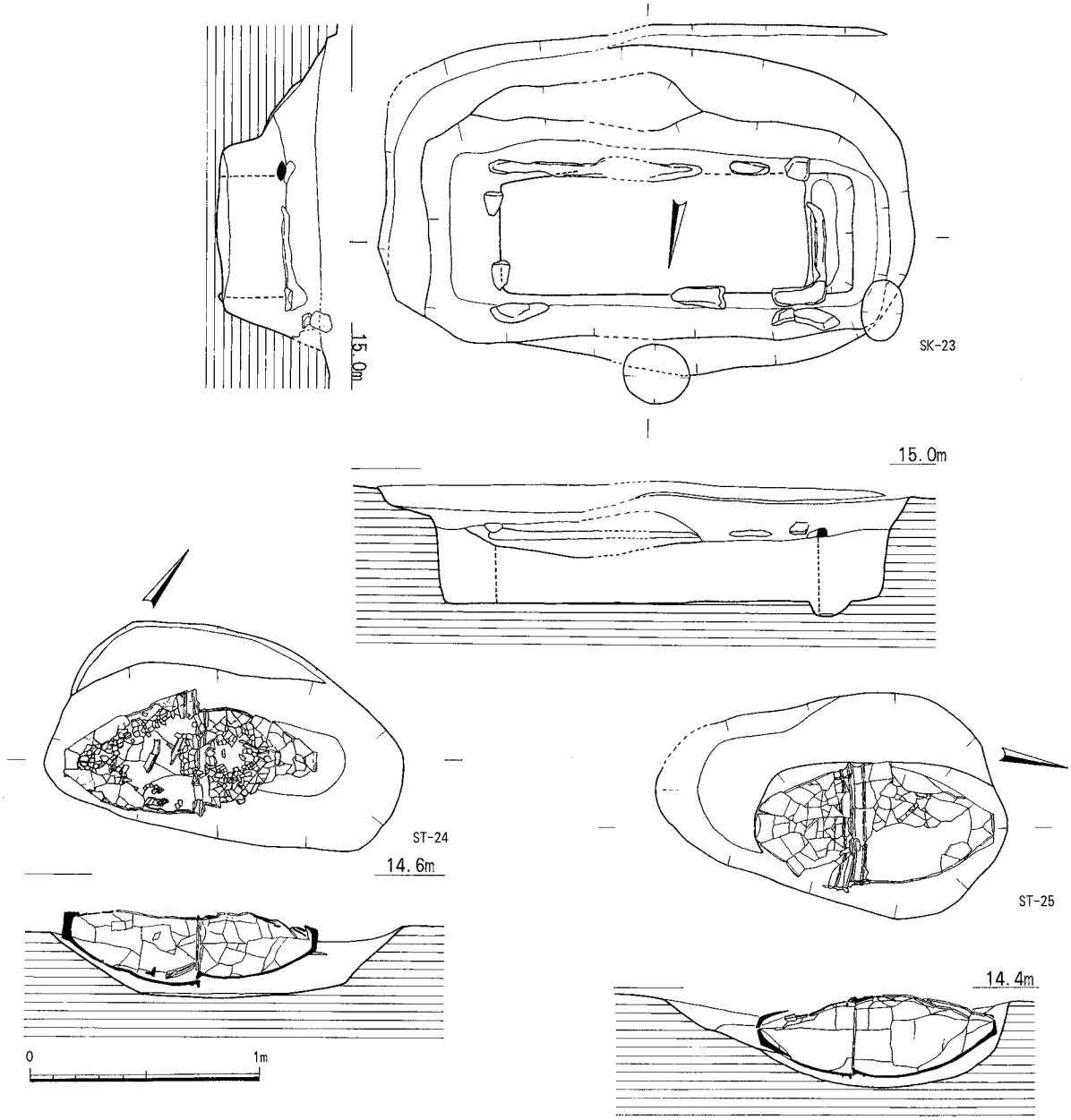
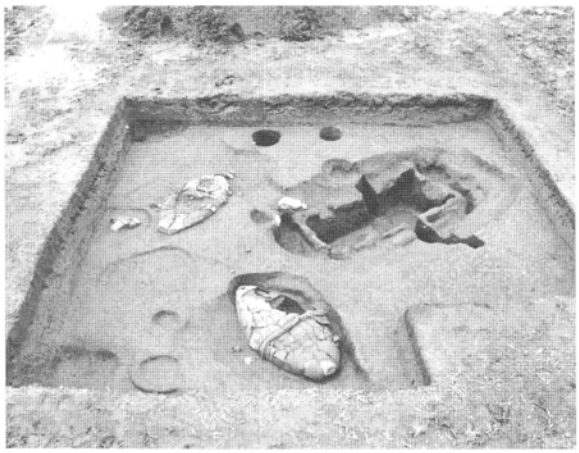
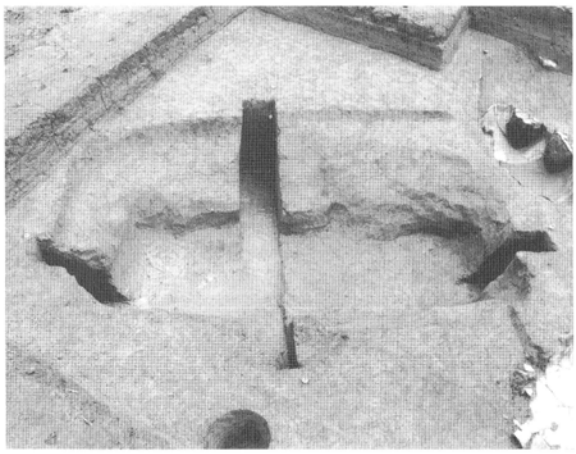


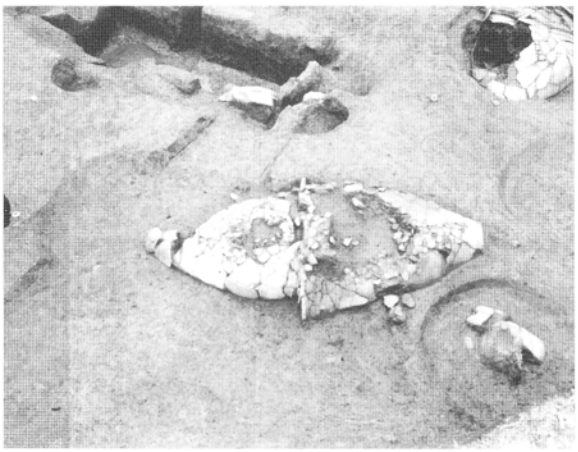
Fig. 25 SK-23·ST-24·25実測図 (1/30)



Ph. 29 D-4区（南から）



Ph. 30 SK-23（北から）



Ph. 31 ST-24（南から）

Ph. 32 ST-25（東から）

を付す。調整は口縁部、凸帯付近がヨコナデ、他は風化により不明。

下甕(16)は器高57.5cm、復元口径45.2cmを測る。口縁部は逆Ｌ字状を呈し端部を丸く収める。口縁部下に１条の三角凸帯を付す。調整は口縁～凸帯がヨコナデ、胴部外面が縦ハケ、内面がナデを施す。

ST-25（Fig. 25・26　Ph. 32・33）

ST-24の南に位置する接口式の甕棺墓である。墓壙は長さ155cm、幅98cm、深さ40cmを測る。主軸をＮ－169°－Eにとり、埋置角はほぼ水平。

上甕(17)は口径51.7cm、器高40.4cmを測る。口縁部は逆Ｌ字状を呈し、口縁部下に１条の三角凸帯を付す。調整は口縁部、凸帯付近がヨコナデ、胴部内面がナデを施す。他は風化により不明。

下甕(18)は口径50.0cm、器高61.8cmを測る。口縁部は逆Ｌ字状を呈し、口縁部下に１条の三角凸帯を付す。調整は口縁部内外がヨコナデ、胴部外面が縦ハケ、内面がナデを施す。

Ｄ－５区（Fig. 27　Ph. 34）

Ｃ－５区の西に位置する。検出した遺構は竪穴住居、柱穴である。

SC-5（Fig. 27　Ph. 34）

西側は区外に延びる。方形を呈し、深さ6cmを測る。中央が浅く窪み焼土がみられる。弥生土器片が出土している。

Ｄ－６区（Fig. 27　Ph. 35）

Ｄ－５区の南に位置する。検出した遺構は柱穴である。SP-29から縄文土器の細片が出土しているが、時期は不明。

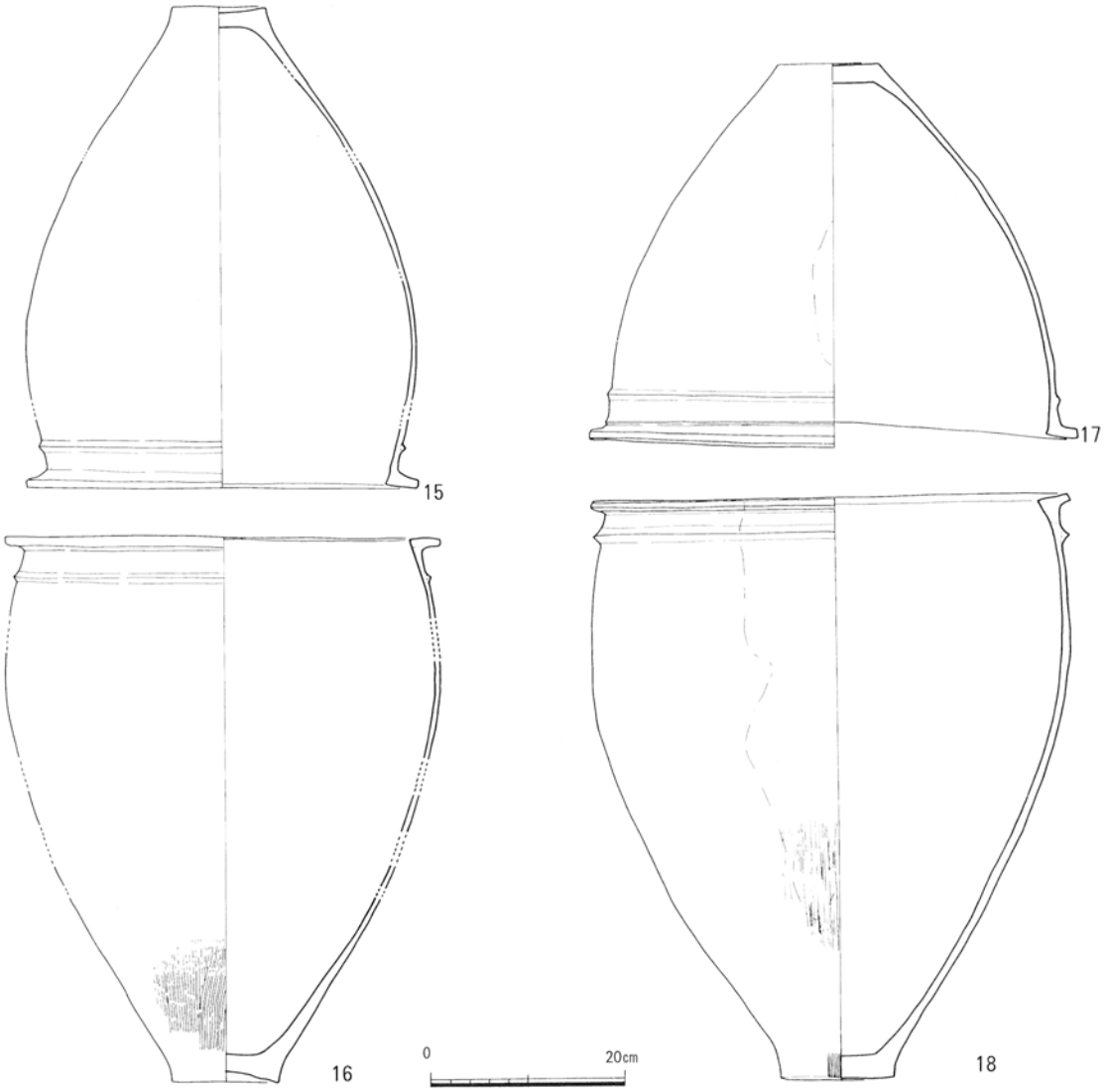
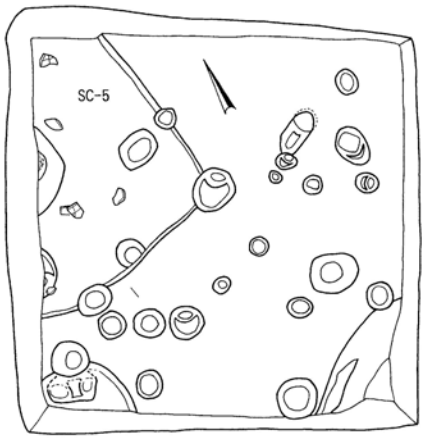
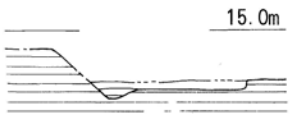


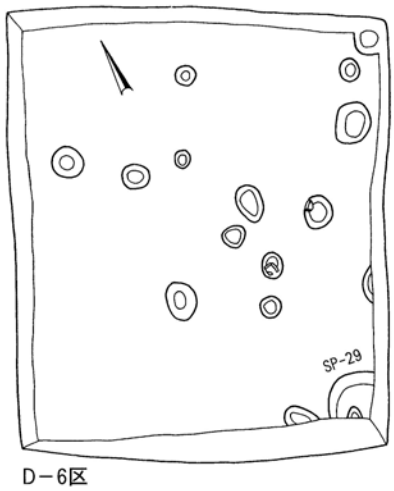
Fig. 26 ST-24·25甕棺実測図 (1/8)

Ph. 33 ST-24·25甕棺



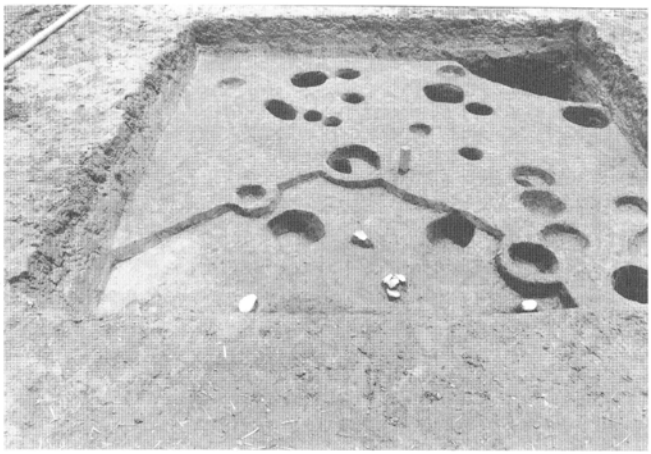
D－5区



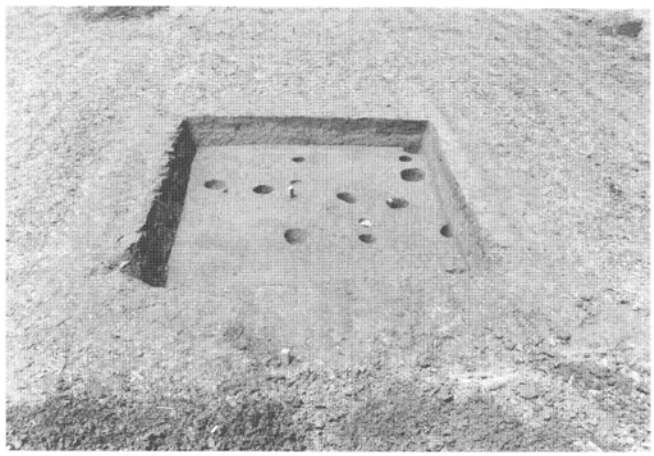


D－6区

0　2m



Ph.34 D-5区(西から)



Ph.35 D-6区(南から)

Fig.27 D-5･6区遺構配置図及びSC-5断面図(1/60)

Ⅳ．おわりに

今回の調査は基礎杭部分のみの調査で、調査面積は対象地の１割に満たない。このため全体を把握することは出来なかったが、調査で明らかになった点について簡単に述べて終わりとしたい。

まず遺構の分布は北側に寄るがこれは本来の分布の他に要因の一つとして水田造成の削平により南側部分の遺構が消滅したためと考えられる。

遺構の中心は中期前葉～中葉の甕棺墓を主とする墓地群とそれに後出する溝である。時期的には土壙墓SK-23が先行し、甕棺墓群が続くものとおもわれる。ST-42から副葬品として翡翠製の勾玉が出土したが、墓壙や甕棺の規模、配置等には他の甕棺墓との特別な差異はみられず優位性は認められない。現時点においてST-42のみが副葬品を持ち得た理由はわからない。

墓域については東西方向に列状に延びるように見られるが、時期の異なる溝も同様の方向をとるため地形的制約による可能性がある。

蒲田部木原７次出土勾玉の調査結果

埋蔵文化財センター　比佐陽一郎

標記の件について石材の同定を目的とした調査の結果を記す。

資料の外観は乳白色と緑色が混在した色調で、一見、翡翠と見られるが、同様な色調の石材は他にも種類があることから、いくつかの方法で確認を行った。

翡翠（ヒスイ）は「高圧変成鉱物として広域変成岩や曹長岩にともなって産する。細粒の緻密な結晶の集合となり白色、灰色のものから緑色、青色の宝石として利用されるものまで多様。硬玉ともよばれる。」石材である。比重は3.34、硬度は6、条痕は白色（豊他1998）。また主成分はナトリウム(Na)、アルミニウム(Al)、珪素(Si)で、特にナトリウムの含有は硬玉の特徴であり（藁科1999）、緑色の成因は微量のクロム(Cr)によるとされる（端山1982）。

比重測定

重量：1.811(g)　水中重量：0.543(g)　＝ 3.335

蛍光X線分析

カルシウム(Ca)や珪素(Si)が強く検出される他、翡翠の構成元素であるナトリウム(Na)、アルミニウム(Al)も明瞭に認められる。また色の特徴とされるクロム(Cr)も検出されている。

X線回折分析

全て合致するものではないが、硬玉の結晶であるJadite($NaAlSi_2O_6$)に近いピークが得られている。

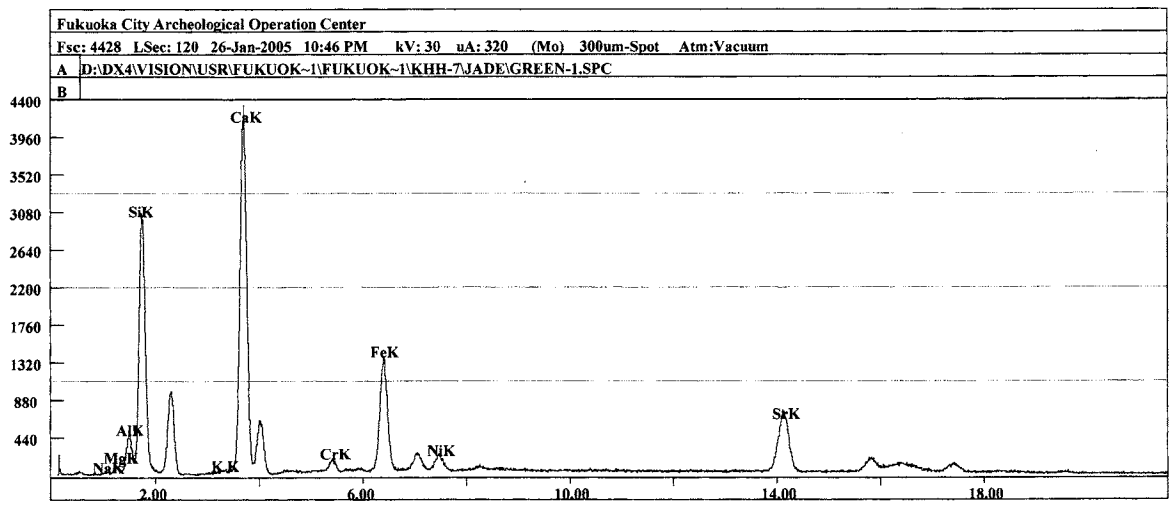
以上のように見た目は勿論のこと、いずれのデータも本資料が翡翠であることを示すのに不都合はない結果となっている。

（参考文献）

端山好和1982「ひすい　翡翠」『増補改訂　地学事典』平凡社（地学団体研究会・地学事典編集委員会(編)）

豊遙秋・青木正博1998『検索入門　鉱物・岩石』保育社

藁科哲男1999「浜黒崎野田遺跡出土の玉類産地分析」『富山市考古資料館』第18号　富山市考古資料館



蛍光Ｘ線の分析結果

報　告　書　抄　録

ふりがな	かまたへきばる
書名	蒲田部木原７次
副書名	
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第836集
編著者名	中村啓太郎
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神１丁目８番１号
発行年月日	2005年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
蒲田部木原 遺跡群７次	福岡市東区 蒲田3-771-1他	401301	0003	33° 37′ 50″	130° 29′ 17″	20030621 ～ 20030811	213	倉庫建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
蒲田部木原 遺跡群７次	墓地	弥生時代	甕棺墓 土壙墓 竪穴住居 溝	弥生土器	

蒲田部木原　７次

福岡市埋蔵文化財調査報告書第836集

2005年（平成17年）3月31日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印刷　有限会社 須恵フォーム印刷
福岡市南区檜原2-3-5